



Title	地方都市中間層の生活心理と意識構造(一) : 北海道帯広市における実態調査中間報告
Author(s)	大江, 健; OE, T
Citation	北海道大學 法學會論集, 9(3), 55-108
Issue Date	1959-01-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/17057
Type	departmental bulletin paper
File Information	9(3)_p55-108.pdf



地方都市中間層の生活心理と意識構造 (一)

——北海道帯広市における実態調査中間報告——

大江 健

(帯広畜産大学政治・社会学研究室)

- 一、はしがき
- 二、調査の目的と概要
- 三、調査結果の分析

〔一〕 生活態度の基調と動向

〔二〕 生活関心事項順位表と政治的関心の度合

〔三〕 中間層の生活意識の二重性

〔四〕 成行主義と既成事実への屈服

〔附〕 帯広市民生活意識調査質問票(以上本号)
——中間層の政治意識の基調と構造(一)——

一、はしがき

この調査は、質問紙法による意識調査の試みである。面接法によらなかつたのは、適当な調査員が得られず、すべて筆者ひとり

で、短期間に実施せねばならぬ事情のためであつたが、地方の研究者にとつては、こうした事情は、少なからず共通のものと思われる。

いわば、「窮余の一策」として採用したこのような方法が、はたしてどれだけ利用価値のあるものか、筆者の知りたいのは、つまるところ、この一点であり、本稿も、そのために、大方の御示教を得べく、とりあえず草された序報のようなものである。

とりわけ、厳密なサンプリングにもよらぬブリテスタのつもりのもものが、筆者なりの感想では、いわば大まかな打診としては、予期以上の手ごたえを感じ、「やつただけのことはあつた」と思われるので、正直に報告することにした。報告の機会を与えられ

た本学会の御好意に心から感謝するしだいである。

二、調査の目的と概要

この調査の直接の目的は、筆者の生地であり、学生生活をのぞき、現在まで三十年間、直接の生活環境であつた北海道帯広市における「中間層」の生活意識というものを、種々の問題観点から総合的・統一的にとらえようとするものである。

それは、報告の過程で漸次明らかにされることであるが、ここで、調査全般の基調をなす問題意識のひとつについて、記しておきたい。

「北海道」という地域社会は、その成立形成の沿革的理由や、地理的・産業的事情などから、他府県にくらべて、「封建的」とよばれるものの制約が少なく、「近代的」な性格をもつているとは、本道の学者や知識人によつても説かれ、一般的・常識的な見解となつているものようである。たしかに、筆者じしんの経験や調査等からしても、帯広を中心とする十勝地方についていえば、とくに、根室本線の沿線地域は、士幌・広尾両支線の沿線地域よりもいつぱんに人びとのパースナリティが開放的であり、同じ農村といつても、豆作・酪農によつて商業的農業が営まれているところでは、一種の合理主義的性格や個人主義的エラストといったも

のも認められるようであつて、これを例えれば、筆者も戦後二カ年住んだ経験のある東北地方の山形市や、その近郊農村とくらべるならば、その相異は、いかにも分明、との印象を抱かしめるていものものといつてよい。しかし、この印象的な精神的風土の地域差から、直ちに、北海道の社会と文化、つまりは「人間の」近代のV性格を断定することは、どうであろうか。なるほど、北海道が生んだ各界の人物をみても、政治面では、日教組・炭労・国鉄等、大組合の首脳者として活動していることに着目させられるし、文学・音楽や芸能界方面でも、いわば、伝統的ではなくて近代的なほうの分野で、和風でなくて洋風のスタイルで進出・活躍していることが注目される。これは、北海道の文化の進行方向を考へるうえに、参考さるべき事実の一面だと思つものであるが、北海道の社会事象を支えている心理的基盤の△近代化Vを証する直接の論拠にはなるまい。

つまり、封建遺制の解消ということは、それだけでは「近代化」を意味しないのであつて、このことは、わが国のような後進資本主義社会では、とくに重要な認識だと思ふ。とくに、開明官僚の上からの指導によつて、開拓されてきた北海道のばあい、例えば、農村に伝統的な部落制・共同的規制がないとはいつても、それに対つてあるものは、単純に「近代的」なものとはいえず、ひとく

ちについて、いわゆる「官僚制」であるといつてよい事情を見出すのであるが、帯広その他市部でも事情は同じといえるのではない。先日、某有力地方紙に、帯広人の気質について、「終戦後、食糧事情の悪化したなかで、配給辞退者が市内だけで三割もあつた」ことをあげ、もつて帯広人の独立心と逞ましい生活意欲をみるべきだ、といった談話記事がのせられていたが、筆者の見解からすると、この「配給の三割辞退」は、まず、なによりも政府への協力の態度、もしくは「お上の呼びかけ」に対する忠実さを示すもので、依頼心が強いというのではないが、さりとて、とくに

独立心を示したものでは決してないと思う。政府の拓殖政策あつての北海道であつたから、道民の政府に対する信頼度は、いつぱいかなり高いとみてよいのである。また、社会的底辺での生活形態についても、近年、例えば、在来の結婚披露宴に代つて、会費制の結婚祝賀会が激増してきているが、祝賀会の発起人・世話人があるのにもかかわらず、わざわざ当日だけの媒妁人を頼んでいるというようなことが平気で行われており、生活合理化のもりでやつていることにちがいがいが、形式としてみれば、旧いものと新しいものとの雑居でしかなく、決して近代的なものを生み出したとはいえない。それはちようど、まだ・みのる氏原作の映画、「気ちがい部落」の一場面、レコードによる読経で葬式が

営まれる場面を想い起こさせるに足るものがある。しかし、北海道には、まだ氏のいわゆる「日本文化の根底にあるもの」——すなわち伝統的な部落共同体秩序に相当するものがなく、「駐在」や「国の法律」に对立抵抗するのは、戦後一時期の革新勢力くらゐのもので、この社会には、日本に特徴的な「二重政府」や「二つのモラル」といった現象はない。

要するに、よかれあしかれ、しつかりした「伝統」もないが、さりとて、ハッキリした「近代」もなく、あるのは「日本の官僚制」だというのが筆者の基本的理解である。

この調査およびこれに引つづいて行われる調査は、右の見解の当否を検しようとの意図をもつており、それによつて、通常、よく「北海道の特殊性」とか特殊事情といわれる社会的・文化的側面を明らかにしたいと思う。

また同時に、いわゆる封建的伝統をもたず、開明官僚制のもとに行われてきた「欧化」が、意識の面で、どんな状況をもたらしているかをしらべ、明らかにすることができれば、欧米文化の受容のしかたという日本全体の問題を考察するうえに、重要な参考となるうと思ひ、そうしたねらいをもこの調査のプログラムには含ませてある。

以上のような問題意識をひそめて計画・実施にかかつたのであ

るが、実際には、さしあたり、最近の社会心理学や、いわゆる近代政治学が一般に問題として、「地方中間層」を対象にしてしらべることとなり、報告もその順序で行われる。

そうなたた主な理由のひとつは、もともと、この調査の動機が、筆者個人の教育目的にかかわっており、勤務先大学の一般教育課程における社会学および政治学の講義と、とりわけ地域の社会教育への参考資料を得たいという願望に発していることによるのであるが、これらがはたしてどれだけ意義のある資料であり、筆者の願望がどれほど満たされたかについては、ようやく、「やつただけのことはあつた」と感じて自から慰めておししかいうことはできない。

私事にわたり恐縮である。次に調査の概要について述べる。

調査地帯は、北海道の東南部、十勝平野一〇、八二三方秆の中央に位し、明治三〇年代以降、「十勝の中心地」となり、昭和八年、市制施行、同三〇年一〇月の国勢調査では、人口七〇、〇二七人、世帯数一四、五三〇戸、人口密度は、一平方秆当り一、三八八・六人（北海道全体では六〇・七人、市部二六七・七人、郡部三八・四人）で、室蘭・札幌に次いで高く、昭和二五年から三〇年にいたる間の人口増加率は、三五・二％で、特殊な事情にあつた千歳を別

とすれば全道で一位を占めた。三二年隣接の川西・大正両村を併合して、人口九七、〇〇三人、世帯数一八、八六五戸となり、面積は従前の五〇・四三平方秆から一躍、六六七・四五平方秆に拡張され、遠く日高山脈の頂上にいたり、クマ熊の出る市ノの異名をとつたが、この併合は、多分に政治的理由によるものごとくで、社会学的には、旧市部と、その後背地をなす周囲の川西・大正地区を含む十勝郡部との間柄を、全国にも類例の少ない典型的な「都鄙共同体」フラットとしてみるのが正当であろう。この調査で帯広というのは、とくに断らないばあいのほかは、この都鄙共同体の中心をなす帯広旧市内のことで、こは、面積一〇、八七八・八四平方秆、人口二七二、九二六人（昭三〇国調）をもつ十勝の交通・産業・金融・行政・教育・医療・娯楽・文化等、諸般にわたる中心都市として、活潑な活動を営み、その機能や各種機関・施設からすれば、人口二〇万の都市に匹敵するといわれている。北海道の首都札幌から汽車で八時間、一步駅前に降車すると、各地への大型バスが引きも切らず発着しているのを見、市中に入れば、商店・飲食店・病院・映画館・学校・書店等がいかにも多く、一見して後背地農村地帯のサービス・センターたることが知られるであろう。しかし、同時に、産業面では、従来、農産物集散地として、および各種商品の中間問屋としての役割が主であつて、工業としては、

農産物加工部門以外見るべきものはない。したがって、住民の所得水準は一般に低く、大都市におけるような貧富の差はみられず、ひいて社会的・政治的対立要因も深刻なものはないといえる。現在も発展途上にあり、なお、開拓地の気風が続いているのもあるうか、落着きや深みはないかわりに、全般的にアッサリした屈托のない気分が支配的で、明るい小都市だということができよう。

この帯広で選挙権をもつ市民のうちから、層化無作為抽出で二五〇ないし三〇〇の標本調査を実施するつもりであったが、種々の都合で、結局、今回のところは、夏期休暇に入る直前の七月二十一日、市内I中学に依頼し、本稿末尾付掲の質問票六〇〇部に依頼状、および切手を添付し、送り先を記した返送用封筒を添えて、同校の生徒を通じ、父母兄弟その他、帯広に居住する二〇歳以上の男女に配付してもらった。

配付数六〇〇のうち、一六四の回答返送が得られたが、内五は満二〇歳未満の男女によるものであったので、これを除き、一五九本、二六・五%の回収率であった。ほとんどが依頼通り七月二十八日までに着し、その後、ローカル放送を通じ呼びかけてもらったりしたが、返送されたのはごく少数であった。

回答者数一五九は、昭三〇国調による帯広市(川西・大正地区を含む)の二〇歳以上人口五二、四一一名の三三・〇分の二に当り、

その男女別内訳は、男一一八名七四・二%、女四〇名二五・

二%、性別不明一名〇・六%であった。年齢別にみると、二〇歳代二七名、三〇代二五名、四〇代七四名、五〇代三三名で、四〇代が最も多く四六・五%を占め、五〇代これに次ぎ二八・〇%であった。なおこれを、質問票二五の一による党派別分類とクロスさせたものが、第一表で、世代のちがいによる支持政党のちがいがかなりハッキリあらわれている。党派別平均年齢を算出すれば、Lグループは四三・六歳、Sグループ三六・四歳で、自民党派は社会党派よりも平均七・二歳も年が多い。無答(ないし non-partizan もしくは

第1表 回答者の年令別・性別・党派別構成

	L. D. P. gr.			S. D. P. gr.			Non p. or neutral or D.K.				計
	Male	Female	計	M	F	計	M	F	?	計	
20台	6	3	9	7	6	13	2	3	—	5	27
30台	3	1	4	9	8	17	3	1	—	4	25
40台	29	5	34	24	5	29	4	6	1	11	74
50台	18	1	19	5	0	5	8	1	—	9	33
計	56	10	66	45	19	64	17	11	—	29	159

は neutral を意味する N グループのばあい、平均 四一・八歳であつた。

次に回答者の職業を、性別・党派別で見たところ、第二表 A および B が得られた。中間層

では自民党の支持率が高く、新中間層、ホワイト・カラー層では、社会党の支持率のほうがやや高い。専門ないし事務的職業をもつて社会の

第2表-(A) 男子回答者職業別分類

	自男	社男	N男	計
専門的職業	3	3	2	8
教師	0	2	0	2
医師	0	1	0	1
僧侶	1	0	1	2
建築・電気	2	0	1	3
管理的職業	6	4	3	13
公務管理	0	2	0	2
企業管理	6	2	3	11
事務的職業	15	19	5	39
官公庁事務	8	10	3	21
会社団体事務	7	9	2	18
技術的職業	4	4	0	8
官公庁技官	3	1	0	4
企業技術者	1	3	0	4
保安サービス	2	0	0	2
消防夫	1	0	0	1
自衛隊員	1	0	0	1
労務現業	2	3	0	5
非熱練的	2	0	0	2
半熱練的	0	2	0	2
熱練的	0	1	0	1
販売的職業	16	7	5	28
商店主	8	4	1	13
製造販売業	3	0	1	4
サービス業	3	2	0	5
屋外販売業	2	1	3	6
農作農業	6	2	2	10
自作農業	5	2	2	9
酪農経営	1	0	0	1
無職	2	3	0	5
計	56	45	17	118

第2表-(B) 女子回答者職業別分類

	自女	社女	N女	計
専門技術的職業	0	6	1	7
教師	0	3	0	3
洋裁教師	0	0	1	1
生花茶道教授	0	1	0	1
助産婦	0	2	0	2
事務的職業	0	1	0	1
会社団体事務	0	1	0	1
従事者	0	1	0	1
技術的職業	0	1	0	1
官公庁技官	0	1	0	1
労務現業	2	2	0	4
非熱練的	2	1	0	3
半熱練的	0	1	0	1
販売的職業	2	0	0	2
サービス業	2	0	0	2
金融的職業	0	0	1	1
質屋業	0	0	1	1
主婦	6	7	7	19
元教員・主婦	1	1	0	2
元事務員・主婦	1	1	0	2
主公務員妻	0	3	0	2
会社員妻	1	1	1	3
酪農経営主婦	1	0	0	1
家庭主婦	2	1	6	9
家事手伝	0	0	2	2
学生	0	1	0	1
その他	0	1	0	1
元事務員	0	1	0	1
計	10	19	11	40

中で仿っている婦人層は、ほとんどが社会党を支持していることも印象的である。

さいごに、これら回答者の階層帰属意識はどうか。質問票の問一〇によつて得られた回答結果が第三表である。

この質問は、被調査者の社会的地位や役割への自覚をみようとするものであると同時に、生活安定感を測る尺度のひとつとして行われたのであるが、問一や四などの事実調査による客観的な分類とは、かなり興味ある異同が示されたことについては後述にゆずり、ともかく、中間層帰属意識の高いことが認められてよいであろう。労働階級や知識階級を選んだ者も、特に社会党(S)グループでは、ほとんどがホワイト・カラー層で、もし、「あなたや、あなたのご家族のくらしは、帯広で、上・中の上・中の中・中の下・下のどれに属すると思いますか」といつた質問を行つていたら、上や下と答える者は、まずあるまいと思われる。

なお、回答者の学歴や、帯広・北海道在住年数等も明らかにしたいが、紙数その他の都合で以下の記述の中に含めたい。

如上の一般市民層を対象とした調査結果を中心に、補完的・副次的に実施した他の調査の結果を参考として、逐次報告を進めることとしよう。

第3表 階級帰属意識分類

	中流	労働	下流	知識	上流	無答	計	
L	M	27	10	8	3	0	8	56
	F	7	2	1	0	0	0	10
	計	34	12	9	3	0	8	66
S	M	17	16	4	6	0	1	44
	F	9	5	1	4	0	1	20
	計	26	21	5	10	0	2	64
N	M	9	2	2	0	0	4	17
	F	7	0	1	0	1	2	11
	?	0	1	0	0	0	0	1
	計	16	3	3	0	1	6	29
計	(47.8) 76	(22.6) 36	(10.7) 17	(8.2) 13	(0.6) 1	(10.0) 16	(100.0) 159	

三、調査結果の分析

【一】生活態度の基調と動向

さて、これら帯広の新田中間層の人びとは、一般に、どのような態度、もしくは姿勢で日常生活をいとなんでいるのであろうか。筆者は、まず、こころみに左記の質問を提出した(質問票問二二)。

【問】人の生きかた、くらしかたには、いろいろありますが、次にあげたものうちで、どれがいちばん、あなたの気持に近いのですか。ひとつだけ選んで○をつけてください。

イ、一生懸命にはたらいて金持になる

ロ、刻苦勉強して名をあげる

ハ、金や名誉を考えずに、自分の趣味に合つたくらし

をする

ニ、その日その日をのんきに、クヨクヨしないでくらす

ホ、世の中の正しくないことをおしのけて、どこまでも清く正しく生きる

ヘ、自分一身のことを考えずに、世のため人のために

すべてをささげつくす

第 4 表

	イ		ロ		ハ		ニ		ホ		ヘ		ト		チ		リ		ヌ		
	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	
L 20-													6	2		1					
L 30-													5		1	1					
L 40-	1												25	4	2	2		1			
L 50-					3	1	1						10		2						
L	1		0		4		1		0		1		52		9		1				0
S 20-	1				1	1							3	4	2						
S 30-					2	1			1				4	6		1	1				
S 40-					1		2		1				20	4	1	1	2				1
S 50-					1								3								
S	1		0		7		2		2		0		44		5		3				1
N 20-					1	1					1		1	2							
N 30-													3	1							
N 40-	1				1	1	1			1			2	3		1					
N 50-	1				1				1		1		3	1	2						1
N	2		0		5		1		2		2		16		3		0				1
Total 165	(2.4) 4		0		(9.1) 15		(2.4) 4		(2.4) 4		(1.8) 3		(67.9) 112		(10.3) 17		(2.4) 4				(1.3) 2

ト、まず自分の家庭と仕事を大切に守りつとめて、他人に迷惑をかけないことだ。そのうえで、できればひろく世の中のために役立つていくのもよい

チ、愛情本位、家庭本位でいく。坊くのも家族の生計を立て、ゆとりあるくらしをするためだ

リ、どんな職業でも仕事でもいいから、それに成功し、有名になつてステキなくらしがしてみたい

ヌ、自分だけにしかない強烈な個性をもつた生きかたをしてみたい。そしてそれをできるだけ多くの人びとに示してやりたい

回答を集計した結果は第四表のとおりで、年齢・性別また党派別の区別なく、一般に、限られた生活圏を安固に守つていこうとする態度がハッキリあらわれている。すなわち、(ト)と(チ)、および(ハ)と(ニ)を合算すると九〇パーセントに達し、立身出世主義や理想主義の態度をとろうとする者は僅々数%にすぎない。これは、おそらく戦後一三年にしてようやく経済的安定を得つつある中間層の生活態度の一般の傾向を示すものと考えられる。

本年、時処を異にし、対象を異にして行つた他の五つの調査でも全く同様の結果が得られている。参考までに(一)、(三)を示そう。

まず、第五表は本年八月、帯広市で行われた大学公開講座を受

講した十勝管内、および帯広市内の中小教員八七名について上記と同じ質問によつて得た結果である。八七名のうち、じつに八〇名、九五%が小市民的生活の安定を望んでおり、立身出世主義といつた志向は全く表面にあらわれていない。

次の第六表は、十月に池田町での労協講座を機会に、全通東十勝特定局支部の組合員三四名を対象に行つた調査結果であるが、これでは、アイテムに多少変更があり(チ)までは、前と同じであるが、以下次のようになつている。

リ、ひとにめいわくをかけずに、できるだけ楽しくくらす

ヌ、前の(リ)に同じ
れにプライドをもつて生きたい

一人で二つ、ないし三つマークした者があつて、点数と人数が一致しないが、如上の傾向は明らかである。ただ、(五)に五点あることは、いなかの実直な勤め人気質を示したものと注目される。

第 6 表

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	無答	計
1	1	1	2	5	0	21	2	2	0	1	1	34

第 5 表

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	計
0	0	13	6	3	0	52	9	1	5	87

第 7 表

		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	無答
L	23	0	0	2	0	0	0	10	5	3	1	2	0
S	67	0	0	9	4	1	0	18	9	8	2	14	2
N	7	0	0	1	0	0	0	5	0	1	0	0	0
T	97	0	0	12	4	1	0	33	14	12	3	16	2

以上につけ加えて、いわば現代学生気質の一端を示すものとして、本年九月に、帯広畜産大学の一年目学生九七名に対して右と同様の質問で実施した調査結果を掲げておこう。第七表がそれである。

ハ・ニ・ト・チ・リを合わせると七五名、全体の七七・三%にのぼり、小市民的生活志向や伝統的処世態度が圧倒的であつて、「ボーイズ・ビー・アムピシラス」に呼応する気風といったものがみられないことは、前と同様であるが、「自分だけの生きかた」というものを持ち、それにプライドをもつて生きたい」にマークした者が一六名、一六・五%あるのは、やはり知的な自覚をもつた青年層にふさわしい回答だといえよう。そして、これが社会党支持の学生グループのほうに多いことも注目されてよ

いであらう。

なお、この学生意識調査において一二名、一二・四%がえらんだ(例)「ひとにめいわくをかけずに、できるだけ楽しくくらす」という態度についてであるが、これは、伝統的な(イ)や(ロ)とも異なり、また、伝統型を含みつついちおういわば、近代市民社会型の(ト)や、現代大衆社会の(チ)とも異なる、いわば過渡期の若いひとびとにみられる生活態度であらう。いわば戦前・戦中派と太陽族との中間派ともいうべき戦後派がもつ、控え目な生活享楽派のそれである。

また、第八表は、本年七月、帯広H高校定時制の三・四年生で、店員・見習工・事務員等の職場をもつ人びとを対象に、二日にわたり、一般市民層対象の質問票とほぼ同様のものを用いて行つた調査結果であるが、

第 8 表

		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	無	不明	欠席
L	1	0	7	1	2 (1)	1	11 (4)	4 (3)	1 (1)	2	1	0	8	
S	1	0	11	0	3 (1)	0	16 (3)	2 (2)	1 (1)	2	2	1	12	
N	1	0	5	(2)	1 (2)	0	12 (3)	1	(1)	0	1	5	2	
T	3	0	23	1 (2)	6 (4)	1	39(10)	7 (5)	2 (3)	4	4	6	22	

第 9 表

	○	△	—	×	イ	無答
LM 56	49	3	1	1	0	2
LF 10	9	0	0	0	0	1
L 66	58	3	1	1	0	3
SM 45	41	0	0	1	0	3
SF 19	16	0	1	0	0	2
S 64	57	0	1	1	0	5
NM 17	13	1	0	1	0	2
NF 11	9	2	0	0	0	0
N? 1						1
N 29	22	3	0	1	0	3
T 159	137	6	2	3	0	11

これでも前記同様、(f)および(i)に集中している。なお、この表でカッコ内の数字は、二つ以上の回答を選んだ者があつたことを示している。

生活圏を限定して安定を求める態度は、次の調査結果からも間接に推察されよう。

すなわち、第九表は、質問票第三二項の一四番目、「狭いながらも楽しい我が家」についての回答の集計であるが、全体の八六・二

%がこれに同感共鳴しており、同感共鳴できない者は、一五九名中、わずか三名にすぎない。回答を記入しなかつた者を除外すれば、九二・六%がこのような気持で生活しているわけである。

このような、つつましく、ひかえめな生活態度や気持をもつて生活するとき、第一○表にみるような生活感覚ないし気持を抱くことになるのは、自然であるといえよう。すなわち、「あなたは、現在、幸福ですか」との第一一問にたいし、一五九名中の約半数、七四名四六・五%が「とくに幸福とはいえないが、まずしあわせにくらしていると思う」との答をえらんでいるのである。「幸福」概念は、積極的・能動的の概念であり、「しあわせ」というのは、とくに「不幸がない状態」の概念である。「不幸でないだけしあわせだ」とか、「無事だしあわせだ」などの用法からわかるように消極的な状態概念なのである。日本人の伝統的な控えめな幸福観をあらわすことばと考えられるが、とにかく、失業とか病気などの災厄によつて、「とくに不幸でないだけシアワセだ」としてつつましく現状に安んじようとする態度が強いこと、また、これを、後にみるように、「身の程を知れ」とか「上をみるな、下を見よ」といった伝統的ステロ版への収斂の強さと思ひ合わせるとき、この人びとの処世態度の基調の所在は、ほぼ明らかといえるのではあるまいか。

第 10 表

		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	(へ)*	ト	チ	リ	ス	ル	ヲ	無付
LM	56	11	10	1	1	27	0	1	0	2	0	0	1	2
LF	10	3	1	1	0	4	0	1	0	1	0	0	0	0
L	66	14	11	2	1	31	0	2	0	3	0	0	1	2
SM	45	8	5	0	0	25	1	0	0	3	1	0	0	1
SF	19	4	6	0	1	6	0	0	0	1	0	0	0	1
S	64	12	11	0	1	31	1	0	0	4	1	0	0	2
NM	17	3	2	1	1	7	0	0	0	0	0	0	0	3
NF	11	1	3	2	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
N	29	**5	5	3	1	12	0	0	0	0	0	0	0	3
T	159	31	27	5	3	74	1	2	0	7	1	0	1	7

* 例の末尾の「と思う」を抹消, ** N? 1 のぶん計上

「幸福である」が三一名一九・五%、「幸福だと思う」が二七名一七・〇%で、計五八名三六・五%となるが、じつは、いまの青年層では、「幸福」と「しあわせ」の区別がつかない傾向があり、また、とくに、書きことばでは、区別されない傾向が一般にあることを考慮すべきである。

ともあれ、「不幸」と答えた(イ)および(ロ)をあわせてもわずか八名、「何ともいえない」の七名を加えても一五名に過ぎないことが印象的で、政治的文脈からは「天下泰平」論のおこされるのも尤もな観がある。しかしこれは、調査対象、とくに実際の回答者グループの性格によるものであつて、物的・心的に不幸な家庭からは、調査方法の限界もあつて、十分な回答がえられなかつたことによるところもある。しかしなお、調査地の概況で前述したように、貧富の差や社会的障壁が著るしからぬ当地では、深刻な欲求不満は、まずないといつてよく、したがつてまた、社会党勢力が伸張してきているとはいへ、急激な変革を望む向きもまず見当たらぬことは、筆者のふだんの見聞からもちしかである。

【三】生活関心事項順位表と政治的関心の度合

社会を構成している大多数の人びとは、それが市民とよばれようと、庶民といわれようと、また、大衆と称されようと、とにかく

く自分で俯いて自分や家族の生計を立てている人たちである。職を失えばたちまち路頭に迷わねばならない人たちである。かれらがまず日常の職業活動に身心を勞するのはまことに当然である。たとえ、生活の心構えとしては、家庭本位・愛情本位であつて、實際にも、精神生活の面では家庭が中心であつても、現実には、むしろ職場のほうに、時間と労力が費されていることが通常であろう。そうして、民主政治が前提とする市民―公衆の政治的関心は、ともすれば日常的生活関心とは別個に、第三の地位ほどしか与えられないのではなからうか。それが「日常化」しているようにみえる場合でも、せいぜい、新しい事件やニュースとして娯楽やリクリエーションと異ならない次元でうけとめられ、消費的に享樂されている傾向がありはしまいか。つまり、政治的アパシーの伝統型に対する現代型のもんだいである。

今回の調査は、そこまで深くしらべようとはしていない。問題の最初の輪廓だけをとらえようとしたにすぎないが、おのずから、いまいつたような傾向があらわれてきはしまいか。

【質問】 次の七つのうちから、日常、あなたが最も深く関心をもち、心をくばっているもの四つを選んで、順位を附してください。

イ、職業や職場に関すること。学生ならば学業や学校のこと、

家庭婦人ならば家事のこと

ロ、家族、もしくは家庭に関すること。および友人知己のこと

ハ、娯楽・趣味・リクリエーションに関すること

ニ、社会的・政治的な公共の問題に関すること

ホ、宗教上の信仰に関すること

ヘ、世間のしきたりやならわしに関すること

ト、となり近所の動静やうわきに関すること

この第一八問にたいする回答をいちおう集計の結果は第一一表のごとくであつて、総体として、第一二表のような関心順位表が得られた。これは、第一一表のT(計)のみについて、I・II・III・IVにそれぞれ4・3・2・1点を配点して得られた数値にもとづいて順位を出したのである。予想どおり、第一位は職業・職場への関心、第二位は家族・家庭への関心であつて、両者を合わせると総点数の六〇%を占め、第四位にある娯楽関心を加えると七〇%となり、社会的・政治的関心は一五%に満たない。

(二)の公共的関心が第三位を占めるということは、それだけとつてみれば心強いように思われるかもしれないが、これには、わざわざ質問紙の「政治的」の文字を抹消し、「社会的」のみをマークしているものも二、三あり、「社会的な公共の問題」とはいつても、年輩の販売業者などでは、町内のお祭りとか、P・T・A

第 11 表

		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	無 答	T	
I	L	F	5	2	0	0	0	0	0	2	9
		M	32	12	1	3	1	0	0	8	57
		T	37	14	1	3	1	0	0	10	66
	S	F	11	3	1	1	1	1	0	1	19
		M	30	5	2	3	0	1	0	4	45
		T	41	8	3	4	1	2	0	5	64
	N	16	3	0	1	1	0	1	7	29	
T	94	25	4	8	3	2	1	22	159		
II	L	F	2	2	0	2	1	0	0		7
		M	7	24	3	6	2	2	2	(13)	46
		T	9	26	3	8	3	2	2		53
	S	F	2	7	3	2	1	0	1		16
		M	2	24	1	10	2	2	0		41
		T	4	31	4	12	3	2	1	(7)	57
	N	3	10	0	4	3	0	0	(9)	20	
T	16	67	7	24	9	4	3	(29)	130		
III	L	F	0	0	2	0	0	5	0		7
		M	2	3	18	13	3	3	4		46
		T	2	3	20	13	3	8	4	(13)	53
	S	F	3	2	4	5	2	1	0		17
		M	3	6	9	11	2	11	0	(22)	42
		T	6	8	13	16	4	12	0		59
	N	1	3	4	3	2	4	2	(11)	18	
T	9	14	37	32	9	24	6	(29)	130		
IV	L	F	0	0	3	0	1	1	2		7
		M	1	3	4	9	5	12	4		38
		T	1	3	7	9	6	13	6	(21)	45
	S	F	0	2	5	4	2	3	1		17
		M	3	3	14	7	1	3	7		38
		T	3	5	19	11	3	6	8	(9)	55
	N	0	2	3	5	2	1	4	(12)	17	
T	4	10	29	25	11	20	18	(42)	117		

第 13 表

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
I	66	12	2	5	0	1	1
II	17	39	6	16	1	4	2
III	2	17	24	23	0	7	9
IV	2	6	23	18	2	11	12
得点	321	205	97	(15.7) 132	5	41	40

第 12 表

1	イ	446	34.0
2	ロ	339	26.0
3	ハ	193	14.3
4	ニ	140	10.6
5	ホ	88	6.7
6	ヘ	68	5.2
7	ト	43	3.3
計		1317	100.0%

の運動会寄付とか、あるいは共同販売運動くらいのところを意味しているばあいが少ないことが、その後の検討によつて判明している。

第一三表は、北教組に加入している中小教員八七名についての調査結果であるが、こ

こでも「社会や国家の公共的・政治的問題」に対する関心は、数値からいつて一五・七%、第三位とはいえ、前者、一般市民のばあいより僅かに一%高ただけで、けつして政治的関心が旺盛とはいえそうにない状態である。教員のばあい、宗教的関心がほとんどゼロにちかいかいのも注目し値する現象である。

次に、全通東十勝特定局支

部の組合員三四名についてみよう。これも内二名を除くほかはみな社会党支持者である。

この質問票では、アイテムの立てかたがかなり異なっており、イ、職業や職場に関すること

ロ、家族もしくは家庭生活に関すること

ハ、友人のこと

ニ、趣味・娯楽・リクリエーション

ホ、宗教上の信仰に関すること

ヘ、世間のしきたりやならわしに関すること

ト、流行や新しい出来事、ニュース

チ、となり近所の動静やうわさばなし、自分への評判など

リ、社会的公共問題、とくに政治問題

ヌ、異性への興味・関心

ル、おしゃれ

となつてゐる。

集計の結果は、第一四表のとおりで、宗教的関心はオシャレへの関心と同じく最低で、異性への興味・関心の半分にも対していない。問題の政治的関心は、ここでも第三位であるが、娯楽関心に倍していることは、この人びとの恵まれない生活状態を反映するものとみてよいであろう。だが、しかし、「流行や新しい出来

第 14 表

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	無答
I	23	4						1	1			5
II	6	19					1		2	1		5
III		2	2	4	1	6	8		6			5
IV		2	3	4			8	3	9	1		5
V		1		6	1		4	2	5	3	4	5
得点	139	107	12	26	4	18	48	13	54	9	4	75

事、「ニュース」への大衆的興味・関心が、個人的娯楽関心に比して、やはり倍も高いということは、これで個人的娯楽欲求が補償されているとみることもでき、また、社会的・政治的関心と同程度であるということは、なにか、この人びとの政治的関心の質的性格——いわば、大衆性といったものを暗示しているようにもおもわれる。すなわち、政治的関心の現代型として、流行やニュースに対すると同じような態度で政治問題に対する傾向であり、これは、裏返せばそっくりそのまま——現代型の政治的無関心に転換するものである。つまり、政治問題への関心も、組織的指導が

与えられなければ、それらは生活と直接関係のない単なる「事件」や「ニュース」として、娯乐的消費財なみにあつかわれてしまうという傾向である。

政治的関心、ひいては世論の組織化が行われないところでは、また、政治への無力感と諦念が支配して、いわゆる伝統型の無関心が増殖されるわけであるが、さすがに、全通労組員のばあいには、たとえ郡部のめくまれぬ人たちでも、一般市民層のばあいにくらべて、その数値は一二・四パーセントと低くはあつても、以上のようになるとき、——アイテムの数が多くなつていことはべつに——伝統型の無関心は少ないとみてさしつかえないようである。

なお、参考までに帯大学生一年百九十七名についてみると第一五表のようである。アイテムは全通労組員に対すると同じであるが、(ロ)に、「および衣食住に関すること」がつけ加つている。

ここでは、第一位と第二位は前と同じであるが、第三位に「異性への興味・関心」がき、第四位は「趣味・娯楽・リクリエーション」への関心であり、前三の場合、いずれも第三位を占めた社会的・政治的関心は第五位に落ちている。数値の占める割合からいつても、グッと下つて九・五パーセントに過ぎない。もし、「スポーツ」を入れていたら、もつと低くなつていたかもしれない。

第 15 表

		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	T
I	L	6	5		3	1		1		0	4		20
	S	33	19		2			3	1	4	6	1	69
	N	2	1										3
	T	41	25	0	5	1	0	4	1	4	10	1	92
II	L	7	3	3	1		1	2		0	3		20
	S	12	11	10	14			3	1	6	6	1	64
	N	1	1					1					3
	T	20	51	13	15	0	1	6	1	6	9	1	87
III	L	2	3	4	3	1		1		0	5		
	S	7	9	1	8	1		8	1	12	18		
	N			1						1	1		
	T	9	12	6	11	2	0	9	1	13	24	0	
IV	L	1	1	1	6			2		3	1		
	S	2	5	12	10		2	3		11	9	1	
	N		1	1	1								
	T	3	7	14	17	0	2	5	0	14	10	1	
V	L			4	1			4	1	0	3		
	S	2	3	7	8	1	1	8	2	8	5	2	
	N			1				1		1			
	T	2	3	12	9	1	1	13	3	9	8	2	
得点	% 粗点	320	238	110	152	12	9	94	11	(9.5)	186	14	1266
順位		1	2	6	4	8	11	7	10	5	3	9	

……おしゃれ
 ……異性への興味関心
 ……社会的政治的公共問題
 ……近所の動静・うわさ・評判
 ……流行・新しい出来事・ニュース
 ……世間のしきたり・ならわし
 ……宗教上の信仰
 ……趣味・娯楽・リクリエーション
 ……友人のこと
 ……家族・家庭・衣食住
 ……職業・職場・学業・学校

ただ、これは、本年四月入学し、暑中休暇を経たばかりの学生であつて、年齢も一九歳が最も多く、二〇歳が三分の一という程度であり、大学自体も、地方小都市郊外にある八ヶ岳産V大学であるという特殊事情も考慮されねばならないであらう。また、この年齢の学生で政治的関心が高いということは、必ずしもよいとのみいえないこともあわせ考慮する必要がある。

一九や二〇の年齢は、何事にも興味・関心の強くはたらく時機にあたつており、生活関心が質量ともに強かつ大であることを考慮すれば、たとえ、その順位は学生生活のなかで第五位であつても、たとえば一般市民層の生活における第三位よりも、主観的にも、また社会的・客観的にみても強く烈しいということもありうると思わねばならない。とくに、組織的指導がなされるばあい、対社会的にそういうことが考えられよう。

ところで、この集計表をみて、興味ぶかい点のひとつは、Lグループ二〇名の関心のありかたである。すなわち、「異性への関心」は数値にして五二点、「娯楽関心」は同じく四一点あつて、全体の傾向と合致するのに、「社会的・政治的関心」は、わずかに六点であつて、八位の「宗教的関心」の八点より低く、七位の「流行や新しい出来事、ニュース」に対する関心、二四点の四分の一にしか当らないということである。すなわち、社会党よりは

自民党のほうをえらんだ、帯大一年目学生にあつては、政治的関心は、調査対象全体の第五位に対して、第九位なのであり、きわめて低調であるということがいえよう。

これは、どうしてこうなのか。その点は、こんごの資料分析にまたねばならない。ただ、Lグループの学生は、比較的よいくらしの、家庭的にも恵まれた、いわば坊ちゃん学生が多いものごとくであり、「政治的関心」なるものは、上昇が没落か、ともかく変動する不安定階層に強くおこるもので、貧富いずれにせよ、安定したところには弱い、という一般的傾向法則を思えば、如上のこともひとまず肯ずかれるように思う。

さて、前掲の第一一表にかえつて、一般市民層からの回答者一五九名を自民(L)・社会(S)・無党(N)の三党派別に分け、イ・ロ・ハ等、各事項に対する関心評点を算出したものが第一六表である。これで見れば、Lグループは、Sグループよりも無回答者が多かつたためもあるが、政治的関心は低調であり、非政治的・私的な人となり近所の動静やうわさVへの関心が強いようである。Sグループは、Lグループよりも職業・職場への関心、また、遊びや楽しみへの関心が高いと同時に、社会的・政治的関心も高く、近隣集団の動静やうわさなどに対しては無関心であることがわかる。こうした傾向は、SグループがLグループよりも

第 16 表

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	無
L 66	180	143	60	71	25	35	20	10
S 64	191	146	69	95	24	44	11	5
N 29	75	50	11	27	19	9	12	7
T 159	446	339	140	193	68	88	43	

年齢的にみて若いこと(平均年齢、L四三・六歳、S三六・四歳)によるかもしれないが、他面、「世間のしきたりやならわし」にたいする関心は、このグループのほうが、Lグループよりも高いのは興味ぶかいといわねばならぬ。

政治的・社会的関心がことに低いのは、自民党支持の婦人グループであつて、SF一九人の二四点にたいし、LFは一〇人で、わずか七点にすぎない。

さきにもたように、これら他方都市中間層の生活心理として、社会的・政治的関心がないのではないが、まず何よりも自分の職業と家族を守ろうとする意識がつよくはたらき、対社会的には「安全第一」の態度がとられる。その政治的関心はつねに周囲を見廻わす「日和見」的態度をと

もない、自主的・態動的たりえない傾向がある。後に知られるとおり、社会的「理想」をもたないのではないにしても、理想を追い求めては「現実」の生活に破綻をきたすので、行動的になれない。しかし、現実の生活が脅かされない範囲では、できるだけ理想を実現してゆきたい。こうした「生活意識の二重性」といつたものがあつて、これが政治的観点から「中間層の日和見主義」とよばれるものの心理的基調をなしているとおもわれる。それゆえ、この人びとは、生活に危険を感じると政治的無関心を装い、「趣味・娯楽・リクリエーション」に逃避し、あるいは、全く政治的に無力なことを痛感したり、現実の政治に絶望したりすれば、宗教的信仰によつて不満や緊張から解放されようともするであろう。

そういうわけで、政治的関心と娯楽関心、また宗教的関心の三者は密接な関係にあると思われるが、いま、(一)を中心とし、ハ・ニ・ホ三者の関係をみると、一、二位では、娯楽関心と宗教的関心はほぼひとしく、一位では、両者合わせて政治的関心と同量にちかいが、二位では三分の二となり、三位では逆に二分の三倍に増大し、四位でも五分の六倍である。全体の得点では、一九三にたいする二〇八で、《遊び心》と《信仰心》のほうが政治的関心より大である。なお、宗教的関心は、無党グループ——政治的中立派(N)——に強いことが注目されてよい(NはNON-PARTIZAN

もしくは NEUTRAL の略符である)。

【三】 中間層の生活意識の二重性

後進国中間層の生活意識の近代化・民主化は、いわば上方から下方へ、周辺から核心へと進展する。いいかえれば、理想的なイデオロギーとしてはうけ入れられても、現実の生活感覚にまで浸透しきることは、一般に困難である。

調査結果をみよう。

調査方法は、質問票の第三二項で、「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」以下、九つのことわざや、言葉にたいして、同感共鳴できれば○、できなければ×。もし気持としては同感であつても、考え方としては賛成できないものには△。考え方としては賛成だが、気持としてはピツタリせず、ついてゆけないと思えば下線。なお、はじめて聞く言葉で、意味もピンと来ないものには(イ)と記入してもらふこととして、各人の反応をしらべたのであるが、まず全体としては次のような結果が得られた。

A、天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず (三二

の三八)

この近代的人間平等観にたいしては、第一七表にみるように、LSNの別なく圧倒的多数が同感共鳴している。ところが、

B、なにごとく優勝劣敗、よいものが残るのが自然だ

という弱肉

強食論的言

辞にたいし

ては、第一

八表にみる

ように、男

も女も、約

六〇%がい

ちおう同感

であり、四

〇%の者は

優劣強弱の別による勝敗を肯定して

いるのである。ただ、肯定派は自民

党グループに多く、四七・八%のほ

り、否定派は社会党グループに多い

が、このグループでもなお肯定派は

三六・五%を占めること、さらに、ま

た、Sグループの婦人において、肯

定派がとくに多いことが注目される

べきであろう。社会党グループの婦人

第 18 表

	○	△	—	×	イ	無
LM 57	29	10	4	7	1	5
LF 10	3	2	1	3	0	1
L 66	(47.8) 32	12	5	(15.1) 10	1	6
SM 45	16	9	5	12	0	3
SF 19	7	5	1	2	1	3
S 64	(36.5) 23	(22.2) 14	(9.5) 6	(22.2) 14	1	6
T 130	(42.3) 55	(20.0) 26	(8.5) 11	(18.5) 24	(1.5) 2	(9.2) 12
M 101	45	19	9	19	1	8
F 29	10	7	2	5	1	4

第 17 表

	○	△	—	×	イ	無
L 66	47	6	2	0	1	10
S 64	48	3	4	1	2	7
N 29	13	2	0	0	1	13
T 159	108	11	6	1	4	30

に、こうしたイデオロギーへの親近を示すものが多いということの理由としては、わが国では、ブルジョワ民主主義革命による婦人の解放が行われなかったから、個我意識にめざめ、ふつうであれば自由民主主義を信奉し、ブルジョワ政党を支持すべき婦人が、個我の自由を求めて社会民主主義勢力に加盟しているということなのであろう。じじつ、日本の自由民主主義の諸価値は、新憲法によつて与えられ、いまや社会民主主義勢力によつて保守されつつあるといつてよい。もつとも、これは、ここに問題となつた婦人たちの気持は、この文句を現実合理化の方向にとつたのではなく、自我実現の志向において受取つたとみてのことである。なおまた、保守党グループの肯定派は、個人的生存競争と現状肯定の側に立つて肯定したのであり、革新党グループの肯定派は、階級的進化論と現状変革の立場から、その合理化のイデオロギーとして受取つているのだともみられよう。今後の検討にまとう。次に、

C、女と学問教養のないものは手に負えぬ、孔子も「女子と小人は養いがたし」といつているが、もつともだとおもう(三二の二八)

については、第一九表のとおりの結果がえられた。

これで見ると、肯定より否定が多いことは当然であるが、婦人にあつてすら、肯定が否定十四名の半数、七名あること、また、

第 19 表

	○	△	下	×	イ	無	
LM	56	12	15	1	20	0	8
LF	10	2	4	1	1	0	2
L	66	14	19	2	21	0	10
SM	45	9	11	2	20	0	3
SF	19	4	5	0	7	0	3
S	64	13	16	2	27	0	6
NM	17	4	1	2	5		5
NF	11	1	1		6		3
N?	1						1
N	29	5	2	2	11	0	9
T	159	(23.9) 32	(27.6) 37		(44.0) 59	0	25
M	118	25	27	5	45	0	16
F	40	7	10	1	14	0	8

△印、すなわち、「気持としては同感だが、考えかたとしては賛成できない」もの、逆にいうと、「考え——思想としては賛成できないが、気持——感情——としては同感である」ものが、かなり多数にのぼつていることが注目される。Sグループの婦人に否定が多いのはうなずかれよう。

ともあれ、感情的肯定同感は、無答グループをのぞく回答者一三四名中、六九名、五一・五%で、半数以上もあるわけであつて、「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」の近代の

人間平等思想は、理想としてイデオロギーのうえではひろくうけ入れられてはいても、現実日常の生活感情の層では、最も単純な伝統的差別感情が清算されていないといえるのではないか。

D、上を見るな下を見よ、「上みればあれほし、これほし、ほしだらけ、下みてくらせ、ほしのけもなし」(三二の五)これについてみよう。

回答を中間集計の結果は第二〇表のごとくであるが、完全否定の一三%にたいし、完全肯定は五二%。感情的否定が二二%であるのにたいし、感情的肯定はじつに六七%である。保守勢力にとつては、まことに都合のよい庶民の伝統的処世観であり、メンタリテイであるが、さすがに、S派グループは、L派グループに比して回調者少なく、反対者が多い。LMの賛成と反対は、三七対五であるのにたいして、SMでは、二〇対九と、その相異は明らかなものがある。

しかし、ともかく全体的にみると、本稿のはじめにも認めた現在の限られた小生活圏に安住しようとする傾向は明らかであつて、これを、

E、身の程を知れ(三二の六)

についてみればなおさら確認することができよう。第二一

第 20 表

	○	△	○+△	下	×	下+×	イ	無	イ+無
LF 10	6	1	7	2	0	2	0	1	1
LM 56	37	9	46	2	5	7	0	3	3
	(65.0)	(15.2)	(80.2)	(6.05)	(7.6)	(13.65)		(6.05)	(6.05)
L 66	43	10	53	4	5	9	0	4	4
SF 19	7	3	10	3	2	5	1	3	4
SM 45	20	9	29	3	9	12	0	4	4
	(42.0)	(18.8)	(60.8)	(9.4)	(17.2)	(26.6)	(1.6)	(11.0)	(12.6)
S 64	27	12	39	6	11	17	1	7	8
NF 17	4	0	4	1	2	3	0	4	4
NM 11	7	2	9	3	3	6	0	2	2
N? 1	1								
	(41.4)	(6.9)	(48.3)	(13.8)	(17.2)	(31.0)		(20.7)	(20.7)
N 29	12	2	13	4	5	9	0	6	6
T 159	(51.6)	(15.1)	(66.7)	(8.8)	(13.2)	(22.0)	(0.6)	(10.7)	(11.3)
	82	24	106	14	21	35	1	17	18
F 40	(42.5)	(10.0)	(52.5)	(15.0)	(10.0)	(25.0)	(2.5)	(20.0)	(22.5)
	17	4	21	6	4	10	1	8	9
M 118	(54.2)	(16.9)	(71.1)	(6.8)	(14.4)	(21.2)		(7.6)	(7.6)
	64	20	84	8	17	25	0	9	9

第 21 表

		○	△	—	×	イ	無答
LM	56	41	5	3	2	0	5
LF	10	5	0	2	1	1	1
L	66	46	5	5	3	1	1
SM	45	30	3	2	7	0	3
SF	19	9	2	2	4	0	2
S	64	39	5	4	11	0	5
NM	17	11	3	1	1	0	1
NF	11	6	1	1	1	0	2
N?	1						1
N	29	17	4	2	2	0	4
T	159	102	14	11	16	0	15

表がそれである。圧倒的多数がむかしながらの分限思想、知足安分主義を心のよりどころとし、生活信条としていたのではないか。さきの「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」への共感の態度はどこにいつたか。理想と現実における規範意識の分離、その精神構造における二重性はここに明らかであるといえよう。また、さらに一歩を進めて、**F、ならぬ堪忍するが堪忍**(三二の一六)と、これにつづく同項一七、

第 22 表

		○	△	—	×	イ	無
LM	56	48	3	2	2	0	1
LF	10	7	1	0	1	0	1
L	66	55	4	2	3	0	2
SM	45	31	6	3	1	0	4
SF	19	11	2	2	0	1	3
S	64	42	8	5	1	1	7
NM	17	11	2	1	1	0	2
NF	11	7	0	0	2	0	2
N?	1						1
N	29	18	2	1	3	0	5
T	159	(72.3) 115	(8.8) 14	(5.0) 8	(4.4) 7	(0.6) 1	(8.8) 14

G、権利を主張し、権利のためにたたかうことは、民主主義社会に生きる一人一人の人間の高い道徳的義務である。権利を正当の理由なしに放棄することは、民主主義に対する裏切りである

との回答結果をくらべてみれば、事柄はなおいつそう明瞭になる。Fにたいする回答結果は第二二表のとおりで、保守党支持グループたると革新党支持グループたるとを問わず、この封建的忍従の教義にたいする同調性は強めて高い。無答ないし回答回避

の一四を除けば、同感賛成は八〇%におよぶほどのものである。にもかかわらず、一般的な民主的イデオロギーとして、いわば、「お題目」化し、「タテマエ」化しつつあるとみられるGの「権利のための斗争」の思想にたいしても、またかなり高い賛同率をみせているのである。第二三表がそれである。

ここでは、さすがに社会党グループのほうに賛同率が高く、とくに、下線、すなわち、「考え方としては賛成だが、気持としてはビククリせず、ついてゆけない」と答えた者が自民党グループ

第 23 表

	○	△	—	×	イ	無答
LM 56	25	10	9	3	4	5
LF 10	5	1	2	0	0	2
L 66	30	11	11	3	4	7
SM 45	30	5	4	2	1	3
SF 19	7	5	2	1	0	4
S 64	37	10	6	3	1	7
NM 17	10	3	2	0	0	2
NF 11	3	0	0	1	1	6
N? 1						1
N 29	13	3	2	0	0	9
T 159	(50.3) 80	(15.1) 24	(12.0) 19	(3.8) 6	(3.1) 5	(14.5) 23

に多いという相異がかなり明瞭にあらわれていることが注目される。しかし、全体の傾向としては、無答をのぞく約六〇%が同感賛成——完全肯定であり、エモーションナルにはともかく、イデオロギーとしては賛成という者一九名を加えると七五%にも達しようということは、いまみたところの伝統的忍従道徳への心理的からみつきとかなり奇異なコントラストを形作つているとみられよう。つまり、抽象的・普遍的なイデオロギー——理想や「タテマエ」としては、民主主義を肯定し、受入れ、あるいはこれに同調していても、現実脚下の自分の生活のしかたとしては、採用されるまでに至つていず、ここでは依然として伝統的処世法、生活態度が守られているということである。

このような、いわば上位意識と下位意識との乖離と矛盾を、最も通俗的なかたちで、わかりやすく示す一例をつけ加えて、ひとまず本節の叙述を終えよう。

それは、本道に最も縁の深い、周知の標語——

H 青年よ、大志を抱け(三二の一五)

これに対する反応と、前記の各アイテムに対する回答結果との比較である。開拓の創業者によつて吐かれたこの言葉に対する共鳴は、第二四表の示すように極めて高く、予期以上のものがあつた。

無答の九名を除くすれば、九〇・〇%が同感共鳴しており、常識と

第 24 表

		○	△	—	×	イ	無
LM	56	52	2				2
LF	10	10					
L	66	62	2	0	0	0	2
SM	47	43					2
SF	19	15	1	1			2
S	64	58	1	1	0	0	4
NM	17	16					1
NF	11	9			1		1
N	29	25	0	0	1	0	3*
T	159	(84.3) 135	3	1	1	0	9

して予期される下線や△は数うるに足りない。アイテムの数が多くて、安直に回答されたということもあるが、ともかく、この完全肯定の高率からしても、理想への志向がないわけでないことは否定できない。にもかかわらず、他面では、例えば前々節に報告したように、「狭いながらも楽しい我が家」(三二の一四)に対しては、前掲第九表の示すように、完全肯定は八六・二%、無答を除くすれば九二・六%に達し、ちょうど「大志を抱け」のばあいと同率となる。さらに、上記のE—「上を見るな下を見よ」や、

G—「身の程を知れ」への共感率の高さと見くらべるならば、意識構造ひいてはパーズナリティのチグハグさの一斑が思い知られはしまいか。

他に学生その他を対象に実施した調査結果もあり、筆者としては教育研究資料としても興味あるものと思っているが、紙数の都合もあり、他の機会にゆずつて本節の記述を終える。

【四】 成行主義と既成事実への屈服

—— 中間層の政治意識の基調と構造 (一) ——

「近代という時代は、「歴史は人間によつて作られる」ものだと思、意識されることによつて始まる。国家でも社会でも、人間の知性と意思の力で、自由にこしらえうるものだ、との観念は、「イタリヤ・ルネサンス期の文化」を書いたブルクハルトによつて、反語的に、「かの近代的大謬想」と称され、また、「服従することによつて支配する」ベーコンの知術の社会的適用ともみられうる唯物史観の側からも、決定的な批判をうけることとなつた事情は周知のとおりであるが、ともあれ、このような、人間主体と環境との関係にかかわる△近代的√な△啓蒙^{エナライゼメント}が果されなかつたならば、そもそも人間の歴史√は成立せず、とくに「中世」から「近代」を分つ意味もないであろう。こうした根本的△エトス√の変革こそ、真に△時代√を劃するものだといえるからである。

環境にたいする主体性の意識が自覚されず、社会現象も自然現象とひとしく、「人力の及び難き」モノと観念され、「地震・かみなり・火事・オヤシ」と無力がかこたれたのは、前期的庶民社会のことではあつたが、たとえば「天皇制」や「家族制度」についてみられたように、およそ、△制度▽や△法律▽というものは、人間が何らかの必要に応じて作り用いるモノだ、というようにはとられず、あたかも「自然ニ運行スル天体」でもあるかのように思い込まれたり、あるいは、「障ラヌ神ニ崇リナシ」といつた△物神崇拜▽的な態度で受けとられていたことは、つい昨日までのことのように思われる。

戦後、諸般の民主的変革がなされたにもかかわらず、その△民主化の権力ルート▽は、「上から下へ」のものであつて、支配関係じたいは、基本的には何ら戦前と異ならなかつたため、なお今日でも、一般国民の法意識のごときは、「障ラヌ神」に対するのと変らないようにみえ、反政府・反体制勢力にあつても、たとえば、**rule of law** の前提——自由な討論と説得——を無視した「法治主義」のシムボルをかざされて閉口するといった状態がみられ、また、みずから世論を喚起指導して、反体制立法運動を起そうとする自主的志向が乏しいのである。

要するに、伝統的な被治者意識の支配からの解放は未だ果され

ておらず、「自己責任」(self-responsibility)の意識にもとく「自治」(self-government)の観念は未だ未熟であつて、根本的には辻清明教授が最近の新聞紙上で問題とされたような「受動意識と無力感」が大衆政治意識の基底をなしていると思われる。

さきにみたように、国家というモノをどうみるか、といった、いわば上位意識の面では、この調査の対象となつた中間層市民たちも、伝統的なものの見方、ないし政治意識から全く脱け出していないわけではない。行論の便宜上、再述すれば、質問票第三二項の二七、「国家というものは、人びとが各自の生活の便利のために作つた道具である。お互いのためになるからこそあるので、もし不便なものとなつたり、有害なものになつたりしたら、適当に作り直すか、あるいはなくしてしまえばいい」のアイテムにたいして、一五九名中四五名、二八・三%が同感共鳴しており、無答の二八名一七・六%およびD・Kの六名三・七%、計三四名二・四%を除外しての百分率では、三六・〇%となる。また、「気持としてはピッタリせず、ついてゆけないが、考え方としては賛成である」と解される者が七名、四・四%あり、「考え方としては賛成できないが、気持としては同感である」と解される者が二三名、一四・五%あつたが、無答およびD・Kをのぞいての百分率では、

それぞれ、六・〇%、一八・四%である。これらにたいし、単純もしくは完全否定(×)は五〇名、三一・五%あり、無答およびD・Kを除外しての百分率では、四〇・〇%で、完全肯定(○)をわずかに四%超えるだけである。

このように、以前であれば「危険思想」視されたにちがいない考え方にたいして、かなりの者が肯定的態度を示していることは、戦後の精神状況が、一種の明るい「啓蒙」期をけみしつつある証拠のようにもとれよう。しかし、日常的な、いわば上下位意識の面をみると、事態はすこぶる深刻であつて、近代的意思の伸張がいかに苦難にみちたものであるかを暗示するかのようである。第二五表をみられたい。

これは、質問票三三二の八、「**三度たくメシさえ硬し柔らかしママにならぬが常の世の中**」にたいする反応を集計したのであるが、保守・革新の党派の別なく、圧倒的多数が「同感共鳴」の態度を示しており、「気持としては同感だが、考え方としては賛成できない」と答えた者も一〇%にみたく「反対」は数えるにも及ばない。

これが、さきにみたように、「あなたは現在、幸福ですか」の問にたいして、ほとんどが肯定的な回答をした人びとの答えなのである(前掲第二五表参照)。

第 25 表

	○	△	下	×	イ	無
LM 56	35	7	3	1	2	8
LF 10	8	0	1	0	0	1
L 66	(66.0) 43	7	4	(1.5) 1	2	9
SM 45	29	3	2	3	4	4
SF 19	12	3	1	0	1	2
S 64	(64.0) 41	6	3	(4.7) 3	5	6
NM 17	13	1	1	0	0	2
NF 11	8	1	0	0	0	2
N? 1						1
N 29	(72.3) 21	2	1	0	0	5
T 159	(66.0) 105	(9.4) 15	(5.0) 8	(2.5) 4	(4.4) 7	(12.6) 20

すなわち、一五九名のうち、「幸福である」三一名一九・五%、「幸福だと思ふ」二七名一七・〇%、計五八名三六・五%であつて、これに「しあわせである」二名、および「とくに幸福とはいえないが、まずしあわせにくらしていると思ふ」七四名四六・五%を加えると、合計一三四名、八四・〇%にのぼり、「不幸である」五名、「不幸だと思ふ」三名に、「何ともいえない」七名を合わせても一五名、九・四%にすぎなかつたのである。

もともと、環境変革の意欲が低調であればこそ、こうした結果

が出ていたのであつて、さきに、日本人の「幸福」観は、「不幸な事件がない状態」の觀念に立つており、それにもとづいて、「不幸がないだけしあわせだ」とするひかえめな、消極的な「幸福感」が生れると指摘したが、「はたらき」や「運動」の感覺をともしなわぬこうした受動的な日本人の幸福観ないし幸福感は、機能面からいへば現状維持的のもので、政治的・社会的文脈からすれば、保守的ムードとでもいふべきであらう。

以上、一見したところから、また、例えば次節で示されるデモクラシー観の調査結果——そこでは、デモクラシーを、「人民のための政治」ととつている者が一〇九名、無答を除いて九四・〇%を占め、「人民による政治」と解している者は唯の一名のみであつた——からも推測されるであろうに、政治社会における中間層の「受動意識と無力感」の根柢は深く、かつ強いものがあると思わねばならぬであらう。

ほば、如上の問題視角から、環境にたいする調査対象主体の前近代的・伝統的な態度・意識状況にアプローチを試みたのが質問票第三二項の一と二である。すなわち、次の二つのことば、

I、物事はなるようにしかならない、自然の成行きにまかせて

無理するな

II、出来てしまったことはしかたがない、物事は万事アキラメが肝心だ

これにたいし、前回同様、「同感賛成できるものには○、できないものには×。気持としては同感だが、考え方としては賛成できないものには△。考え方としては賛成だが、気持としてはビツタリせず、ついてゆけないものには下線」を付してもらおうという形式で反応を求めてみたのである。

あらためて説かるまでもなく、第一のアイテムは、「ともかくもあなたたまたまの年の暮」とか、「たくほどは風がもてくる落葉かな」等の史的メイ句にあらわれ、「元朝や一系の天子不二の山」の名吟をものした俳人内藤鳴雪が、その俳号の由来とした処世の信条、「何事もナリユキにまかせろ」態度、——日常的な「環境への依存」^{デペンデンス}心理を現代の帯広市民層について検しようとしたものであるが、政治的文脈からすれば、こうした態度や考え方は、本居国学のイデオロギーなどとも基調を同じくするもので、事大主義的機會主義につながり、そのときどきの政治的動向や支配勢力のいうがままに同調・追隨する伝統的な庶民の非民主的心性を意味している。これにたいし、第二のアイテムは、全く手放しの成行まかせとはかぎらず、ある動向にたいしては抵抗もしようが、

それが結果として与えられたら、もはやこれを造りかえてゆこうとする意志をはたらかそうとはしない心理的傾向をみようとするもので、こうした態度や、考え方は、私的日常生活の局面では、庶民的な「物わかりのよさ」を意味することもあろうが、政治的文脈からすれば、責任意識の低調や、史的経験の蓄積の貧困をまねき、あるいは支配勢力による「既成事実の積み重ね」政略を可能ならしめるものである。

Iは「受動意識と無力感」をソックリ含んでの「成行主義」であるから、これに同感共鳴(○)であれば、IIの「既成事実への屈服」にも当然○ということになるが、IIの肯定は、必ずしもIを肯定することにはならない。裏返していえば、Iには否定的態度(×)を示しても、IIには肯定的態度(○)を示し、「屈服」することはあり得、むしろ、この反応を示す者が多いのではないか。また、それは社会党グループに多く、Iに共鳴するのは、先輩者であつて、自民党グループや、Nグループ、D、Kグループではなからうか。いや、前記へママにならぬが人の世の常の回答結果からすれば、案外、多くの人がこれにも同調するかも知れない。回答結果をみよう。

回答を集計の結果、あらわれた傾向の第一を示すものが第二表である。予想されたとおりに、IよりもIのほうに、ハッキリ、

肯定多く、否定少ない。そして、その肯定率は、Iのばあいは否定率と同じであるが、IIでは否定率の四倍を超えている。

Iの×の四三名二七・〇%は、さきにもたように、「三度たくメシさえ硬し柔らかしママにならぬが常の世の中」と観じ、歎じつつも、ここで、「何事も成行きまかせ」にはしたくない態度を明らかにしている者であつて、これと、「気持は同感だが、考え方としては賛成できない」△の五〇名、三一・四%を合すれば五八・四%となる。完全同調は二七・七%であるから、全然手放しの無抵抗主義的成行主義はさほどでもないといえよう。

しかるに、IIでは、完全賛同率四四・〇%のほり、全面抵抗一〇・〇%、△を加えても三六・四%にしかならない。いかにも「既成事実への屈服・同調」

第 26 表

	○	△	○+△	下線	×	×+△	無答	計
I	(27.7) 44	(31.4) 50	(63.3) 94	(1.26) 2	(27.0) 43	(58.4) 93	(11.95) 19	(100.0) 159
II	(44.0) 70	(26.4) 42	(71.6) 112	(10.0) 16	(10.0) 16	(36.4) 58	(9.45) 15	(100.0) 159

性向が高いことが知られよう。つまり、「成行きまかせ」には反対し得ても、「出来てしまったこと」には抵抗を放棄するという傾向であつて、総じて、現状変革・環境形成の主体的意欲は極めて低調であるといわざるを得ない。

○プラス△を計上して掲げたのは、人は、考えのとおりに行爲するよりは、気持にしたがつて行動するもの、とくに、日常的政治関心が低い大衆社会のメンバーとしては、エモーショナルなものに支配されるとみてよいと思われるからであるが、IとIIとは、やはりIIのほうが高率で、七一・六%。無答を除けば、七八%にちかひ。また、個人的には、知性と意思により行為が決せられる場合が考えられねばならないから、×に△を加えてみたが、上述のとおりで、IIはIにおけるよりも二二・〇%も少なかつた。

なお、「考えとしては賛成だが、気持としてはビツタリせず、ついでゆけない」という「下線」、逆にいうと、「気持としてはビツタリせず、ついでゆけないが、考え方としては賛成だ」という者が、Iの二名にたいしIIでは、一六名一〇・〇%もあつたことは、前出の「ならぬ堪忍するが堪忍」などのばあいと同様、「物事はアキラメが肝心」というのは、なにか一種の権威ある処世訓ともなつていられるようにも思われ、興味ぶかい。この回答を選んだ一六名の内訳は、党派別では、Nグループ四名一三・八%、自民派七

名一〇・六%、社会党派五名七・八%であり、年齢別では、二〇歳四名一四・三%、三〇台四名一七・四%、四〇台五名六・七五%、五〇台一名二・九%であつた。比較的若い世代に多いのは、「出来てしまったことはしかたがない」として、アキラメようとしてもアキラメ切れない若さを証するものでもあろうか。パースナリティの安定度をみる質問、五ないし八、一ないし一七、また一九や、二一ないし二三、二六、二七等の回答の解析によつて示されるのであるが、いまはふれずにおく。

右にみたIよりもIIに○多く×少ないこと、「既成事実への屈服」が著しいことは、他に試みなどの調査でも共通して認められ、確認されたといつてよい。以下数例を示す。

まず第二七表は、本年（昭三三）八月、帯広市において、十勝郡部および帯広市部の小中学校教員一四九名を二クラスに分けて、調査者みずから実施上の諸注意を与え、上記の質問を含めて三六項目にわたる質問票を配布し、質問文を読みあげながら、その場で回答を記入してもらつたものの集計の一つである。二クラス分を合計して掲げた。

これでも明らかなように、IとIIとは、IIのほうが同調肯定率において約二〇%高く、抵抗否定率において一五%低いと

いう顕著な差があらわれている。そうして、Iでは、同調と抵抗とは、一般市民調査のばあいと同じく、ほとんど同率であるが、IIになると、同調のほうが抵抗よりも三三%も多くなつており、これは、一般市民層のばあいの三四%とほとんど一致する。

またIへの抵抗率は三三・六%で、一般市民層のばあいよりも六・六%だけ高いが、IIへの同調率は五一・六%、これまた一般市民層のばあいより七・六%高く、両者のひらきは一八%で、一般市民層のばあいの一七%より大であり、もつて、「既成事実への屈服」性向の相対的強さを知ることができよう。

このことをより端的に示すものは次の分析である。

第二八表は、IとIIの回答を関連させて、どのような回答を、どれだけの方がしたかを見、数の多い順に入ないし九をとり、一般市民層のばあいと対照させたものである。○——○の答えが一般市民のばあいとひとしく最多数にのぼっていること、しかもより高率を示していることは、いささか意外の

第 27 表

	○	△	—	×	無答	両無	計
I	(32.2) 48	21	3	(33.6) 50	9	18	(100.0) 149
II	(51.6) 77	18	1	(18.8) 28	7	18	149

感があるが、「教員の無気力」は、いままなお解消してないのであるか。しかし、一般市民では八・二%で第五位にある×——×組が、教員層では一四・七%を占めて第二位にあることは、その職務柄当然とはいえ、着目されてよい。

ともあれ、いままきに述べた「既成事実への屈服性向の相対的強度」を示しているのは、同じく第二位を占めている×——○グループである。一般市民層では、この×○組は一〇名六・三%で第六位にあるのに対して、教員層のばあいは二二名一四・七%であり、第四位の△——○グループと合わせると、二九名二〇%となる。一般市民のば

第 28 表

	1	2	2	3	4	5	6	7	8			計
教員	○…○ (26.2) 39	×…○ (14.7) 22	×…×	△…△ (6.0) 9	△…○ (5.37) 8	無…○ (4.7) 7	×…△ 4	○…×	○…無 3	其他 13	無…無 18	(100.0) 149
市民	○…○ (18.2) 29	△…○ (15.7) 25	△…△ (12.0) 19	×…△ (9.4) 15	×…×	×…○ (6.3) 10	○…△ 8	無…○ 6	×…下 5	其他 16	無…無 13	(100.0) 159

あい、この△○組が多く、これに×○組を加えると三五名、二二%となり、一位の○○組を凌ぐ。このばあい△○組は×○組のいわば同類項ともみられ、このようにみると、Iには抵抗しえてもIIには屈服する強い傾向があることが明白となる。とりわけ、教員グループのばあいは、ハッキリIに「ノー」といいながらIIに対しては「イエス」となってしまう者が多いことで、それが明瞭に示され、Iに対して、○はもとより、△ではなく×が多く、しかも、IIに対し、×でなく○が多いことで、「既成事実への屈服」と同調性向(automatic conformity)の強さが、相対的に明瞭化することになったのである。

調査対象はみな、日教組の一翼である北海道教員組合のメンバーであつて、年齢構成をみると、一〇歳代が一七名で八九・二%を占め、三〇歳代が一一名で八・四%、他は四〇代一名、五〇代二名であつた。

次の第二九表は、むしろ調査の失敗例を示すものであるが、かえつて参考価値があるかと思ひ掲げた。

これも本年一〇月、十勝郡部の中心、池田町で、全通東十勝特定局支部の組合員三四名を対象に行つた調査結果であるが、サンプルが少数なこと、質問自体に△を欠いたこと、未経験者に依頼

して実施されたことなどの事情から、上例ほどハッキリした数値がえられなかつたものと思われるが、それでもやはり、同様の傾向を認めることはできる。とりわけ、ここでは、前例では、

まだ、Iの×も多いがIIの○がなお多いという片面的なかたちでしか認められなかつたI・II間における○×関係の変動がようやくハッキリしてきている。すなわち、IIにおける○じたいは変わらず、あるいは○と×の差が縮小しても、Iにおいて○よりも×が多くなることで、「成行主義」の減退とは対照的に「既成事実への屈服」性向の強さが鮮明化するという関係である。これは次のより若い世代層の調査結果でいつそう鮮明となる。

第 29 表

	○	—	×	無答	計
I	(38.2) 13	2	(44.0) 15	4	34
II	(41.0) 14	5	(32.3) 11	4	34

以上二例についての感想であるが、全通や日教組といえ、反体制運動の一翼を担う勢力であり、さすがに、IとIIのアイテムのいずれについても抵抗否定の率が一般市民層におけるよりも高い。しかし、同調肯定の率もまた高いのであつて、これからして

もこれらいわゆる革新勢力については、案外に内面的な脆弱性が大きいとみなければならぬのではあるまいか。つまり、社会的現象は自然現象とは異なり、自然の成り行きで出来るモノではない。とくに、政治現象は権力者の政策が中心だから、悪かつたら反対する。相手は人間だから反対する力が強ければ負けることはない、ということとで政治的活動もするのであるが、向うの力が強くてこちらの反対が通らず、相手方の政策が実施される段になると、その情況の変化をたちまち人所与の現実 \checkmark としてアキラメ、次の実践への自明の前提として受け入れてしまうといった受動的傾向、とくに「既成事実への屈服・同調性向」がこれまでにものなかつたであろうか。こうした入政治社会における中間層大衆の受動意識と無力感 \checkmark は、権力者の策に乗せられる心理的盲点であること、前記のとおりである。

なお、前出第二八表のところで、「教員の無気力」うんぬんと記したことも関連して同様の方式により、「三度たくメンさえ硬し柔か^たしママにならぬが常の世の中」に対する反応を求めた結果を参考までに示しておく、調査対象は、むろん、前記の教員層一四九名で、その回答結果は第三〇表のとおりであつた。

抵抗否定率は、一般市民層のその四倍を超えるが、一〇%を越す程度であり、同調肯定率はさほど交りなく、ゆうに半数をオ

ーヴァしている。とくに、印象的と思われるのは、「無答」の高率と、「気持は同感だが、考え方としては賛成できない」と答えた者が一二%にのぼっていることである。

次いでより若い世代層をみてみよう。

第三一表は、本年(昭三三)、七月、帯広H高校校定時制課程の三、四年生一〇四名を調査した結果であるが、IよりもIIにおいて肯定率高く、否定率低い一般的傾向が、まず、鮮やかにあらわれている。

調査対象は、全員、店員・見習工・事務員等の職場生活者であり、本稿末尾に付した質問票第二五項と同方式で調べた党派別分類により、L(自民党)グループ三五名三三・七%と、S(社会党)グループ五〇名三四・〇%とに分け集計を試みたものである。この他に、N(無答ないし non-partizan or neutral)グループ一九名一八・五%がいるのであるが、行論の便宜上、省略

第 30 表

	○	△	—	×	D·K	無答	計
1組	48	12	1	10	1	15	87
2組	39	6	0	6	0	11	62
計	(58.5) 87	(12.1) 18	1	(10.7) 16	1	(17.5) 26	(100.0) 149

した。Tはトータルを示す。

これによつてみると、こんどはハッキリIにおいて抵抗否定が同調肯定よりも多く、ちようど倍になつてゐる。しかし、IIにおいて抵抗は同調の半分以下なのであり、やはり、「既成事実への屈服」傾向は強いといわざるをえない。ただ、しかし、IとIIのいずれにおいても、抵抗否定は、これまで示されたどの調査結果におけるよりも

高く、年齢の若さと、とりわけ、困難な境遇のなかで「偽きつつかぶ」者の意思の強さを示していると思う。

党派別でみると、Iにおいて、LはSよりも同調率やや高く、SはLよりも理智的否定が多

第 31 表

		○	△	—	×	無答	両方ナシ
I	L (35)	(22.8) 8	(22.8) 8	2	(42.8) 15	2	1
	S (50)	(20.0) 10	(28.0) 14	1	(42.0) 21	4	3
	T (85)	(21.2) 18	22	3	(42.4) 36	6	4
II	L (35)	(48.5) 17	(28.5) 10	1	(20.0) 7	0	1
	S (50)	(52.0) 26	(16.0) 8	2	(26.0) 13	0	1
	T (85)	(50.5) 43	18	3	(23.5) 20	0	4

い。そのため、完全否定ではほとんど変りないが、×プラス△では社会党派のほうが高率となつてゐる。IIにおいては、社会党派のほうに抵抗が高く、革新派らしいところを示しているものようであるが、同調率もやや高い。○プラス感情的肯定△では、Sの六八%にたいしL七七%で、自民党グループのほうが高率であるが、×プラス△でも、Sの四二%にたいする四八・五%であり、総じて、党派別による相異はさまで明らかではない。これは、一般市民中間層や次に記述する学生層のばあいと区別される点で、やがてより根本的・一般的に、「政治的革新下層大衆層の文化的守旧性向」について、調査研究の結果を報告する予定である。

次の第三二表は、帯広畜産大学の一年目学生に実施した結果であり、上述の一般的傾向を明確に示している。ま

第 32 表

	○	△	○+△	—	×	×+△	無答	計
I	(14.7) 14	(29.4) 28	(44.2) 42	0	(54.7) 52	(84.1) 80	(1.05) 1	(100.0) 95
II	(44.2) 42	(30.5) 29	(74.7) 71	0	(23.4) 22	(53.6) 51	(2.1) 2	(100.0) 95

第 33 表

	I	II	答 数
1	○	○	9
2	△	○	14
3	×	○	20
4	△	△	9
5	×	△	16
6	×	×	15
(その他)	○	△	4
	×	×	6
計	無	無	1
	無	無	1
			95

第 34 表

	I	II	答 数	%
1	×	○	20	21.0
2	×	△	16	16.8
3	×	×	15	15.8
4	△	○	14	14.7
5	△	△	9	9.5
5	○	○	9	9.5
其 他			12	12.6
計			95	100.0

た、Iにおける否定は肯定の三・七一倍にのぼっており、一般市民層のばあいのちよほど倍の高率を示していることも注目されてよい。そして、Iにおける否定がハッキリIIの肯定を上廻つたのは、こんどがはじめてである。当然、また、肯定率も激減し、わずかに一四・七%を示しているにすぎない。

にもかかわらず、IIの同調率は、やはり依然として四四・二%、一般市民におけると同率であり、これに感情的肯定△の三〇・五%を合すれば七四・七%となり、△を理性的抵抗を示しているものと

とつて、これを×に合しても七四・七%で、とうていかなわぬ。

ところで、これらのIおよびIIの回答を、回答者単位に関係づけ、組別に分類し、抵抗の弱いものから強いものの順に配列すると第三三表となり、さらに、高率の順にならべると第三四表となつて、調査前の予想と全く一致した。

すなわち、まず×○組——Iの「成行まかせ」ないし事大主義には抵抗を示しても、IIの「出来てしまつたこと」となる屈服してしまう者——が最多数で二〇名、二一・〇%を占め、八環境

からの自由Vを志向して、「成行主義」と「既成事への屈服」のいずれにも同調せず、拒否の態度を明らかにした××組は一五名一五・八%で第三位、これに第二位の×△組一六名を加えても三一名三二・八%で、×○組に△○組を加えた三四名三五・七%にも及ばない。しかし、一般市民層や教員層のばあい、一八・二%あるいは二六・二%と最高率を示していた○△組が、ここでは九・五%と激減して第

五位に落ちていることや、第三位まではともかくI——全く手放しの「成行」主義——に抵抗拒否の態度をとるグループであること、また、はじめて、X×組およびX△組がそれぞれ一六%の存在を示したことは、調査対象の大部分が終戦の翌年に小学校に入學し、完全に戦後の教育を受けてきた若い世代層の学生たちであることを思うとき、何かしら頼もしさを感じさせられるが、また、四人に一人の競争率に堪え、入学試験の関門をくぐり抜けてきた人びとであつてみれば、べつにふしぎはないともいえる。

このX×グループや、X△グループの意識やパースナリティが、どけだけ、どのように伝統的制約から解放されており、近代化ないし民主化しているかについてのアータの集析は、すこぶる興味あるところであるが、当面の課題外であり、紙数の都合もあつて、次の機会にゆずらう。

これまでの調査結果を通して印象づけられることの一つは、Iにおける否定率の上昇ぶりの鮮やかさである。すなわち、一般市民二七・五%、教員三三・六%、勤労学徒四二・八%、学生五四・七%となつている。そして肯定率との比は、一般市民一対一、教員も〇三二・四、×三三・六で、ほとんど同率であつたのにたいして、勤労学徒では、否定は肯定のちよつと倍となり、学生では、

三・七倍となつて、反対は同調を圧倒している。

しかしIIでは、否定率は、一般市民一〇・〇%、教員一八・八%、勤労学徒二三・五%、学生二三・四%と上昇しつつも伸び悩みをみせており、肯定率との比も、一般市民での四分の一以下から、教員グループで三分の一に近ずき、勤労学徒で二分の一に接近し、学生でようやく二分の一を超えるという情況である。

だが、いちおう、こうしたグループ別の相異がみられる原因は、主として、年齢の老若と、ひろい意味での教育の差異である。もとより、この調査の対象となつた人びとのばあい、それは單なる学習量の差異ではなくて、時代や社会階層による生活環境の相異にもとづく社会的学習の質的相異を意味している。

こんどの調査では、いま見たように、最初の暑中休暇の経験ももたない、いわば学生としてはヒナに相当する大学一年目学生のグループが、伝統的・前近代的な思维様式からいけば解放されているとの結果が出た。しかし、かれらにしても、例えば、「**三度たくメシさえ硬し柔らかしママにならぬが常の世の中**」のアイテムにたいしては、賛同率九五名中五九名、六二・〇%で、否定(X)は二六名二七・二%、感情的肯定・理性的拒否(△)二七名二二・二%であつて、一般市民層の賛同率六六・〇%、否定はただの四名で二・五%、感情肯定・理性的拒否九・四%にくらべれば、

第 35 表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	○…○	△…○	△…△	×…△	×…×	×…○	○…△	無…○	×…下
20歳代 (28)	(3.55) 1	(7.15) 2	(14.3) 4	(14.3) 4	(14.3) 4	(10.7) 3	3	1	2
30歳代 (23)	(8.7) 2	(26.0) 6	(8.7) 2	(13.0) 3	(13.0) 3	(4.35) 1	1	0	1
40歳代 (74)	(23.0) 17	(20.1) 15	(13.5) 10	(8.1) 6	(4.05) 3	(4.05) 3	2	3	1
50歳代 (34)	(26.5) 9	(5.9) 2	(8.8) 3	(5.9) 2	(8.8) 3	(8.8) 3	2	2	1
計 (159)	(18.25) 29	(15.75) 25	(11.95) 19	(9.45) 15	(8.2) 13	(6.3) 10	8	6	5

	10	10	11	12	14	14	14	
	△…下	○…下	○…×	△…×	下…下	×…無	下…無	無…無
20歳代 (28)	1	1	0	0	0	0	0	2
30歳代 (23)	1	1	0	0	1	0	0	1
40歳代 (74)	2	2	1	0	0	1	1	7
50歳代 (34)	0	0	2	2	0	0	0	3
計 (159)	4	4	3	2	1	1	1	13

否定率が二〇%も高いだけ、明白な相異がみられるが、しかし、賛同率においては、その差わずかに四%。○プラス△により、気持のうちの肯定率をみると、一般市民の七五・五%にたいし、この青春期を迎えた学生たちは、九五名中八六名、じつに八四・二%がフラストレーションを経験し、一種のアンミーの状態にあるということになる。最前にも指摘されたが、戦後の若い知的世代における近代的な市民的精神態度、ないし生活意識の伸び悩みがうかがわれるであろう。

さて、一般市民層のばあいにもどつて、前記質問にたいする回答を、組別に集計して高率の順にならべ、年齢階層別に分類したのが第三五表である。

これで見ると、××組および×△組は二〇歳代においてはそれぞれ一四・三%で、学生のばあいよりはやや低いがさしたる差はない。それが年齢階層をのぼるにつれて低くなり、四〇歳代では四・〇五%と著しい低下をみせ、他面、〇〇組や△〇組の比率が急激に高まっている。〇——〇グループの各世代群で占める割合は、二〇歳代では三・六%に過ぎないが、四〇歳代では二三・〇%にのぼり、五〇代では二六・五%に達する。三〇歳代でも△——〇グループの占める割合は、二

六・〇％に達しており、すでに、二〇歳代と三〇歳代とのあいだでも、明瞭な相異があらわれつつあるが、とりわけ、四〇歳代以上と以下とは、だれの眼にも明らかな相異がある。ここには、 \wedge 世代間の文化的断層 \vee といわれることが、すでにあざやかにその断面を露出させているということもできるであろう。

次に注目されるべきことは、党派別に解析したばあい、Iの成行主義への同調ないし抵抗の態度調査では、保守派グループ(L)と革新派グループ(S)との相異がハッキリあらわれたが、IIの既成事実への同調性向調査では、二派の差はずつと縮小していることである。

すなわち、第三六表にみるとおり、Iの○と×、および△においてもLとSとのあいだの差は著大なものがある。ことは否定率においてSはLよりも二〇％も高い。これは、いうまでもなく、自民党(L)の支持者ないし同調者のほうが社会党(S)の支持者ないし同調者よりも、「物事はなるようにしかならない、自然の成行きにまかせて無理するな」という伝統的な庶民社会の保守的ムードにならずにいるということであり、この点では、いわゆる革新派はヨリ革新的であるといえよう。しかるに、IIにおいて、両者の差は縮小し、ことに否定率では、Iにおいてあつた二〇％

第 36 表

		○	△	一	×	無答	計
I	L	(30.3) 20	27	0	(19.7) 13	5	(100.0) 66
	S	(20.3) 13	18	2	(39.1) 25	6	(100.0) 64
	N	(38.0) 11	5	0	(17.5) 5	8	(100.0) 29
	T	(27.6) 44	50	2	(27.0) 43	19	(100.0) 159
II	L	(50.0) 33	(21.2) 14	7	(10.6) 7	5	66
	S	(42.2) 27	(31.2) 20	5	(10.9) 7	5	64
	N	(34.5) 10	8	4	(6.9) 2	5	29
	T	(43.0) 70	42	16	(10.05) 16	15	(100.0) 159

の著差が全く消滅して、ほとんど同率(僅か〇・三％の差)となっている。つまり、既成事実への屈服・同調・追隨という点では、革新派も保守派とさまで異なるところがないということなのである。そして、これが、前掲諸表に示されたように、いつどの調査でも、IにおいてよりもIIにおいて肯定率高く、否定率低い第一直接の根本的事情であり、また、Iの否定率の上昇にもかか

わらず、IIにおいてその伸びない直接の理由であつたのである。

中間層大衆のこのような構造をもつ現実観が、支配勢力による既成事実の積み上げ政略を可能ならしめてきたことは、われわれの基本的認識である。いわゆる革新勢力による反体制運動が、支配権力の政策にたいするあらゆる熾烈な反対斗争にもかかわらず、いつたん「出来てしまったこと」となると、その「既成事実」を作り変えるための立法運動に向つて世論を結集しようとする試みもなされないのは、このような「受動意識と無力感」を基底とする日本人の現実観Vの構造的特質にもとづくものであらう。

こうした視軸からすれば、現在のわが国の革新派は、名は革新でも、実は単純な憲法諸制度の「保守」派であるともいえよう。

ことに、Iの手放しの環境依存、いわゆる「成行主義」は、けつして言葉本来の意味での保守主義ではないことを思うならば、もうもいえよう。しかし、「出来てしまったこと」はしかたがない、物事は万事アキラメが肝心だ」という論念哲学は、これまた保守主義でもなんでもないので、ひつきよう、×——○ていどの「ハシクタイセイ」勢力は、保守「主義」以前の「保守」勢力だといえるかもしれない。ともあれ、保守主義とか、革新主義とかいうものは、とにかくにも、×——×がつけられたうえでのななしであらう。

そういう意味からも、I・IIの回答を組別に分類して観察に資したのが第三七表である。

回答者全体としては、×——×グループは一五九名中のわずか一三名、八・二％にすぎず、前述教員層の一四・七％、また広島畜産大学入学生の一五・八％の半分にしかなっていないのは心細いしだいであるが、保守派Lグループにたいする革新派Sグループの比較では、前表ではまだ必ずしも明確でなかつた両派の相異点をヨリ明確になしえたと思う。すなわち、単にIIの否定率だけをとつてみれば、両派共に七名で、百分比も〇・三％の差にすぎなかつたが、××組としてみれば、L五名、S六名で、その差一・八％、そしてN(D・Kないし中立)では、さきの二名六・九％は消えてゼロとなつている。これだけでは、Sグループの相対的革新性は明瞭でなく、「既成事実への同調性向」においては、保守・革新両派間にさしたる差異なしとした上記の知見が基本的に妥当しているが、なお、多少のちがいがなければいけない。

すなわち、××組としてはほとんどあらわれていないが、そのいわば潜在的同類項ともいふべき×△組において、Sグループは一名一七・二％と進出して、Lグループの二名三・一％をはるかに引離している。Sグループでは、この×△組が△〇組とならんで最多数を占めているが、Lグループで△〇組とならんで最多

第 37 表

	1	2	3	4	5	6	7
	○…○	△…○	△…△	×…△	×…×	×…○	○…△
L	(21.1) 14	(21.1) 14	(15.1) 10	(3.1) 2	(7.57) 5	(6.06) 4	2
S	(12.0) 8	(17.2) 11	(9.37) 6	(17.2) 11	(9.37) 6	(9.37) 6	3
N	7	0	3	2	2	0	3
T	(18.5) 29	(15.7) 25	(12.0) 19	(9.4) 15	(8.2) 13	(6.3) 10	8

	8	9	10	11			計
	無…○	×…下	△…下	○…下	その他	無…無	
L	1	2	2	2	4	4	66
S	2	2	1	1	3	4	64
N	3	1	1	1	1	5	29
T	6	5	4	4	8	13	159

数を占めているのは、○○組の一四名二一・一％であり、Sグループの○○組は八名一二・〇％にとどまったのである。つまり、このばあいでも、両派の×△組と○○組とを比較対照すれば、やはり、いわゆる革新政党支持派ないし同調者グループには、生活の態度や志向において、伝統への同調に抵抗ないしは拒否の態度をとらうとする革新派らしいところがかかなり明瞭に認められるのである。

しかし、付言するならば、このような、いわば生活態度における政治的革新派中間層の革新性というものも、さきの第三五表の分析や本節を通じての記述から推測されるように、じつは、主として、若い世代のものであり、総じて、この意識調査の結果の全般を通じ、年齢階層によるちがいは、職業や所得、あるいはまた学歴による差異などよりも顕著なものが認められた。むろん、それはまず何よりも、これら中間層における旧きものの解体——伝統の融解——の面を照射してみていることであるが、しかし、だからといって、一般的に、若き世代が文化とパースナリティのうえで、新たな歴史的個性を生産し示しているということはむろんできない。

ただし、調査結果の示すところによると、戦後、文化とパースナリティとの伝統的な統一が失われて、新たな雑居状態が現

われ、マス・コミ社会の影響もあつて、その根底には、やはり、「受
働意識と無力感」がながれているとみられるなかにあつて、少な
くも若き知的世代にあつては、文化とパースナリティのうえに、
「伝統」をはなれて「近代化」のある方向で齊一化が行なわれつ
つあるという徴表を認めることはできる。

それは、例えば、直接には、政治意識と文化の関係、また、北
海道の植民地的な雑居文化とテグハグ・パースナリティを検しよ
うとした質問票第二五項と同一方式の質問に、その他各種の質問
を組合わせてテストすることで、明らかにしつつあるところであ
るが、本節の報告課題の範囲を超えるので、次の機会にゆずつて
この稿を終える。

(次節以下続稿)

--	--

帯広市民生活意識調査質答票

(帯広畜産大学社会学研究室)

1. 答がいくつか用意されているところは、あてはまるものに○印をつけるか、字句を線でかこんでください。その他はそれぞれの間にお答えください。
2. 書き足りない場合は、紙をはり足して記入してください。

1. あなた御自身のことについて

性別 年齢	男 女	満 才	明治 大正 昭和				年 月 日生	出生地	
現住所	帯広市 条 丁目 番地			帯広市 在住年 数	年 月 (2年以上の方は何年とだけ)				
最終学歴又は、在校名	小卒	高小卒	新制中卒	旧制中学	新制高校	旧制高校	専門学校	新制大学	旧制大学
職業及び職場での地位 (できるだけ詳しく書いてください。また、現在無職でも以前職をもつた方は、現無職の次にカツコして元何々と記入してください。) _____ _____									
役 職 (職業以外で何か社会的役職、もしくは団体役員などつとめていられたらそれを、また以前なさつておられたらそれも「元」としてご記入ください) _____ _____									

㊦ 帯広以外にお住まいになられた土地がありましたら、それはどこで、いくつの頃、何年位お住まいでしたか。

例	地名	東京都杉並区	18~24 学生時代	6 年
1	地名			年
2	地名			年
3	地名			年
4	地名			年
5	地名			年

㊦ 現在もしくは以前に札幌方面や道外、ことに東京、大阪などに旅行しておられますか、どの方面に、どのくらいなさっていますか、どんな用向(例えば商用、公務など)で、あるいはどんな機会に(例えば修学旅行、墓参法要など)なさつておられますか。

--

地方都市中間層の生活心理と意識構造 (1)

2. 現在同居しておられる御家族の構成 [家族数 (あなたを含めて)…… 人]

父方の祖父			才	祖母			才	母方の祖父			才	祖母			才
父	実父	養父……	才	母	実母	養母……	才								
兄							姉								
弟							妹								
夫							妻								
子供															
孫															
その他の親族								家事使用人		男		人・女		人	

3. あなたのお育ちになつた御家庭について

親御さんの 職業又は家業			親御さんが つとめた役職			学 歴		
親御さんの御郷里				あなたを養育 なさつた土地				
在住された市、町、村で の生活程度、社会的地位	上		中		下			

4. 次の事項についてお知らせください

家計費	月平均どのくらいかかりますか			内食費はどのくらいですか			交際費は?		
収入	月平均どのくらい得ておられますか				御家族の分も合わせるとどのくらいですか				
納税額	所得税	年	円位		資産税	年	円位		
蔵書数	雑誌類を除いて、単行本をどの位おもちですか	約	冊		職業や試験に直接必要なもの以外では	約	冊		
住 居	親の家・自分の家・借家・間借・社宅・公務員住宅・公営住宅	畳数合計			畳	室数	室		

5. あなたは、ふだん何時に寝て、何時に起きますか。一日の睡眠時間は平均するとどのくらいですか

(就寝時刻) 時 分 — (起床時刻) 時 分
(平均睡眠時間)…… 時間 分

6. あなたは、ふだん気持よく寝られますか

ふだん気持よくねられる 気持よくねむれない (ことがよくある)

7. 気持よくねられないとしたら、その原因について心当りのことがありますか
ある 特になし わからない 答えられない
8. 朝さつぱりつた気分で起きることが出来ますか
たいい爽快な気持で起きる あまりない
さえない気分のときのほうが多い わからない 答えたくない
9. (イ) 新聞は何新聞をおとりですか
とつていない とつている ()
(ロ) ほかにもう一部(とつていない人は新たに)とるとしたら何新聞をとりたいですか—— ()
10. 中流階級, 知識階級, 労働階級, 下流階級, 上流階級, 特権階級の六つのうちで、あなたがたが所属していると思われるものひとつを選んで、それを線でかこんでください。(かならず一つだけにしてください)

11. あなたは現在、幸福ですか

イ, 幸福である ロ, 幸福だと思う ハ, 不幸である, ニ, 不幸だと思う
ホ, とくに幸福とはいえないが、まずしあわせにくらしていると思う ト, しあわせである チ, ふしあわせだ リ, 何ともいえない ヌ, 考えたことがない
ル, わからない ヲ, (その他)→

12. あなたは、家庭的に恵まれて育つたと思つておられますか

恵まれて育つたと思う	そうは思わない	答えたくない	わからない
(その他のお答え)			

13. あなたは現在、家庭的に幸福だと思つていらしやいますか

イ, 幸福だと思つている ロ, 家庭円満である ハ, 幸福とまででないが、まずしあわせだと思う ニ, 家庭的に不幸だと思う ホ, 家庭的に恵まれていると思う ヘ, 恵まれていない ト, 考えたことがない チ, 答えられない
リ, わからない

14. A あなたは現在の職業や職場に満足していらしやいますか

職業に { 満 足 職場に { 満 足
 { 不 満 { 不 満 答えたくない わからない

B

職業に	満足の理由	1	2	3
	不満の理由	1	2	3
職場に	満足の理由	1	2	3
	不満の理由	1	2	3

地方都市中間層の生活心理と意識構造 (1)

15. 現在あなたが、もつとも困っていること、または悩んでいることは何ですか。一つないし三つ、最も切実なものから順に記してください

(事例 家計困難, 経営困難, 負債, 労働過重, 家族間の不和, 家族の病気, 子供の教育問題, 配偶者との愛情問題, など)

- (1) (2) (3)

なお、特にない場合はその旨を記入してください。また一応書いても大した切実な問題でなければカッコしておいてください。

16. あなたは、ほかの多くの人々にくらべて、苦勞が多いほうだと考えますか。それとも苦勞が少いほうだと思いますか

多いほうだ	少いほうだ	とくに多くも少くもない	わからない
-------	-------	-------------	-------

17. (A) 日本人は、アメリカ人にくらべて一般に苦勞が多いと思いますか

イ、苦勞が多いと思う	ロ、少いと思う	ハ、同じことだと思う	ニ、わからない
------------	---------	------------	---------

- (B) 日本人は、中国人にくらべて全体として苦勞が多いと思いますか

イ、多いと思う	ロ、少いと思う	ハ、同じことだと思う	ニ、わからない
---------	---------	------------	---------

18. 次の七つのうちから、日常、あなたが最も深く関心を持ち、心をくぼっているもの四つを選んで、順位を附してください

ただし、イ、ロ、ハ……等の記号だけを右の欄に記入してください

イ、職業に関すること。学生ならば勉学に関すること、家庭婦人ならば家事に関すること

ロ、家族もしくは家庭に関すること。及び友人知己のこと

ハ、娯楽、趣味、レクリエーションに関すること

ニ、社会的、政治的な公共の問題

ホ、宗教上の信仰に関すること

ヘ、世間のしきたりやならわしに関すること

ト、となり近所の動静に関すること(うわさばなしを含む)

(1)——()

(2)——()

(3)——()

(4)——()

19. あなたは、帯広を住みよく感じていますか、住みにくく感じていますか

住みよく感じている	理由	
住みにくく感じている	理由	
どちらともいえない	住みよい点	住みにくい点
わからない		

理由については、わかっているだけ、答えられるだけでけっこうです。またもし、次の20のお答えと同じなら、20に同じと書いてください

20. 帯広に住まわれて、あなたの現在の生活にとり、便利だと思われる点、また不便だと思われる点がありましたら、下記ご記入ください

便利な点	1	2	3
不便な点	1	2	3

21. (A) あなたは、一生帯広に住みたい、あるいは住んでもよいと思いますか

イ、一生住みたい ロ、一生住んでもよい（気に入っているから どこでも同じだろうから ） ハ、そういう気はしない（もつとよいところがあれば移りたい） ニ、当分ならいいが、いつかは他にゆきたい ホ、真平ごめん、すぐにでもはかにゆきたい ヘ、（その他のお答え）

(B) はかに移り住みたいと思うところはどこですか、およびその理由

例えば 東京……仕事の都合上、生活環境として好き 郷里……なつかしい、錦をかざつて帰りたい もつと静かないなかまち……性格や趣味による
 関西の都市……故郷に近く趣味が合う 千島……故郷だし、自然も生活環境も大好き、などと記してください

(ところ)	(理由)

22. 人の生きかた、くらしかたにはいろいろありますが、次にあげたもののうちで、どれがいちばん、あなたの気持に近いものですか。ひとつだけ選んで○をつけてください

- イ、一所懸命はたらいて金持になる
- ロ、まじめに勉強して名をあげる
- ハ、金や名誉を考えずに、自分の趣味に合ったくらしかたをする
- ニ、その日その日をのんきに、くよくよしないでくらす
- ホ、世の中の正しくないこととおしりかけて、どこまでも清く正しくくらす
- ヘ、自分一身のことを考えずに、世のため、人のためにすべてをさきげつくす
- ト、まず自分の家庭と仕事を大切に守つて、他人に迷惑をかけないことだ。そのうえで、できれば世の中のためにも役立つてゆくもよい
- チ、愛情本位、家庭本位でいく、働くのも家族の生計を立てゆとりあるくらしをするためだ
- リ、どんな職業でも仕事でもいいから、それに成功し、有名になつてよいくらしを試みたい
- ヌ、ふつうの人たちにはできない強烈な個性をもつた生きかたをしてみたい。そしてそれをできるだけ多くの人々に示してやりたい

地方都市中間層の生活心理と意識構造 (1)

23. (A) あなたは、日常のおつとめやあるいは勉学以外に、気ばらしや息抜き、楽しみのでだてとして、何か趣味、娯楽、慰安をおもちですか。主なものから順にあげてみてください

例 ゴ、シヨウギ、マージャン、釣、俳句、カメラ、レコード、ラジオ聴取、食事(料理)洋裁、飲酒(日本酒、ビール、ウイスキー、カクテル)映画、ダンス、喫茶店、スポーツ(テニス、野球等)コーヒー、おしやべり、まちをぶらつく、パチンコ、競馬、友だちと飲みあらく、読書(小説、雑誌)……など

(1) (2) (3) (4) (5) (6)

(B) 趣味や娯楽がほしいと思つても、時間や気持、またはお金に余裕がなくてできない、ということはありませんか

イ、趣味、娯楽のための自由な(時間、金)がほしい

ロ、そうしようと思えば時間も金もないではないが、気持のうえでゆとりがない
(理由……)

ハ、とくに不足を感じていない

ニ、むしろ自由な時間をもてあましている

ホ、現状に満足している

ヘ、日常の生活に必要な楽しみは十分とつていると思う

ト、遊ぶことが生活みたくない、人生をエンジョイしている

チ、その他のご感想()

24. あなたの御家庭では、家族連れで花見、運動会、川狩、花火大会、温泉、旅行、映画、お祭見物などに出かけられますか

(A) 主な家族慰安の手段をあげ、どのくらい実行されているか、例えば、映画一月1回、旅行一年1回、花見、等と記してください

(B) 出かけたくても多忙や経済上の都合で残念ながら出られぬということがありませんか

大いにある かなりある まず不足不満なし 現状に満足

(理由) 多忙、経済上の理由、習慣としてやれない、家庭内の家族関係がむずかしい、その他ありましたらお書きください

(B) そういうことには興味も関心もない、ということはありませんか

興味関心なし あまりない そういうことは到底望めないことアキラ
マテている 大いにやりたい できればやりたい

25. あなたは、次の各組について、どちらか一方をとつてくださいといわれたら、どちらをとりますか。えらんだほうに○をつけてください。どちらも好きでない場合はヨリ嫌いなほうに×をつけてください

1 {よい住居 2 {和 食 3 {美 貌 4 {お 茶 5 {正 月
 {よい食事 {洋 食 {健 康 {ダ ンス {ク リ ス マ ス

- 6 {服飾の技能
料理の技能
- 7 {和装の花嫁
洋装の花嫁
- 8 {ナニワブシ
ジャズ
- 9 {お経
讚美歌
- 10 {すもう・柔道・弓
テニス・野球・ピンポン
- 11 {自民党
社会党
- 12 {日本音楽
西洋音楽
- 13 {恋文をもらうこと
恋文を書くこと
- 14 {もつぱら義理人情でゆく
すべて権利義務で割切つてゆく
- 15 {家庭内で家族と楽しむ
家庭外で友人と楽しむ
- 16 {法律を全く知らない人と日常交際する
法律によく通じている人と日常交際する

26. ここ2~3年中に、あなたの生活や人生は、概して現在よりもよくなると思われ
ますか。できたらその理由も書いてください

よくなると思う……

べつに変らないだろう……

わるくなりそうな気がする {何となく……
ある理由で……

わからない……

27. どんな人も多かれ少なかれ心配事をもつていると思いますが、あなたは、これから
さき、現在までよりもずっと心配事がふえると思いますか

イ、ふえると思う ロ、変りないと思う ハ、減るとおもう

ニ、わからない

28. 次の三つの結婚のしかたのうち、どれがいちばんよいと思いますか。ひとつだけ
らんで○をつけてください

1. ふたりの間の自由な交際にはじまり恋愛で結ばれる恋愛結婚
2. なこうどさんが双方の間をとりもち、両家がよろしく願いますということで
結ばれる見合結婚（媒約結婚）
3. 見合にはじまつて好きになり、双方気に入って結婚する型、見合と恋愛を兼ねて
いるので、見合の見と、恋愛の愛をとつて見愛結婚（ケンアイケツコン）とよばれ
るやりかた

29. (A) あなたは、女性の幸福は結婚によらなければ得られないと考えますか
イ、そう考える ロ、そうは考えない、人により、やり方によつては結婚しなく
とも幸福な人生は送れると思う ハ、わからない

(B) 自分の息子や娘が結婚したいという相手が気に入らないとき、あなたはどう
しますか

(C) 結婚したいと思う相手が親の気に入らないとき、あなたはどうしますか
イ、自分の思う通りにする ロ、親の言葉にしたがう

30. 本州のある地方で実際にあつた話ですが、ある家で旧制中学を出ている息子に、父親が突然「しんせきの家について、そこの娘をよめにもらうことにきめたから、よめにもらえ」といった。息子は「どんな人かよくわからないのに結婚するわけにいかない」と答えたところ「それでは何日何時に先方の家について見合をしてからもらえ」といわれる。それも「見合をしたら絶対に断つてはならぬ。そんなことをすると先方の顔にきずをつけることになるから」というのである。息子は「本人とつき合つてみて性格が合うと思つたら結婚したい」と希望したが、どうしてもきき入れてもらえない。とうとう父親と息子は正面衝突になつてしまつた。そうして息子は負けて見合にいつた。ところがかれはすつかり失望して帰つてきた。しかし、かれは自分の意思を通して結婚を断つた。

1. この息子のとつた態度や行動をどう思いますか（立派である、正しい、同情する場合しかたがない、親不孝で感心できない、けしからぬ、勘当すべきだ、何ともいえない、等、いろいろあると思いますが、簡単に肯定か否定かわるようにお答えください）
2. もしあなたが、この息子の立場におかれたとしたらどうしますか

31. これも実際にあつた話です。ある社会学者が関東地方のある農家について、そこの青年といろいろ話をしていました。そこへかれのお祖母さんがあらわれて「昼日中若い者が縁側でのんびりと話などしているのはみつどもない。ほうきでも手にもつて、そうじをしているようなかつこうをして話相手になれつておれ」とその孫の青年をしかつたのです。青年は仕方なく、相手の社会学者に「失礼します」と断つてお祖母さんのいう通りにしました。

これについてどう思いますか。次の四つのうちのどれに最も同感ですか、一つだけ選んでください

1. べつにおどろくことはない、帯広のまちでだつてこれに類したことは珍らしくない。たとえば、老人や子供ならばかくべつ、苦い者や働き盛りのおとなが、休日でもないのに縁側や窓辺で昼寝することなどは近所の手前できかねるようなものだ。青年ははじめから相手に断つてそうすべきだつたのだ。
2. 都会では隣りの家の人が何をしようとお互いに気にとめもしないから、都会ぐらしの学者はおどろいたかもしれない。しかし、世間体を気にすることは、帯広くらの都市では、まだまだなくなならない。このお祖母さんのような人は、私の知つている範囲にもいくらもいるようだし、青年としてもこの場合そうするより仕方がないだろう。
3. いかにもありそうなことだが、困つたものだ。若い人たちが自覚して、漸次こういう愚かしい習性をあらためてゆくのをまつより仕方がないからう。私とその青年の立場に立つたとしても、おそらくバツのわるさで赤面し、ヘンな笑いを浮べながら一応ほうきを手にとつてはくまねをするだろう。つまり、一応祖母や世間、そしてまたバツのわるい微笑で相手の学者にも義理をたてるのである。
4. そんなバカバカしいことは少くも私はまだ見たこと聞いたこともない。おかしい

のを通りこしてあきれてものもいえない。青年も青年である。私なら絶対に動かない。そのまま話をつづける、祖母さんが何か文句をいつたら、ウルサイ、バカなことをいわずに引込んでいろ、とか何とか、反対にしっかりつけてやる。

5. その他のお考え。

32. 次のことわざや言葉について、同感共鳴できるものに○、できないものに×をつけてください。もし気持としては同感だが、考え方としては賛成できないと思うものがあれば△を、考え方としては賛成だが、気持としてはピッタリせず、ついてゆけないと思うものがあれば下線をひいてください（もし、はじめて聞く言葉で、意味もピンと来ないものがあつたら、欄外に(イ)と記してください）。

- () 1. 物事はなるようにしかならない。自然の成行にまかせて無理するな。
- () 2. 出来てしまつたことはしかたがない。物事は万事アキラメが肝心だ。
- () 3. 明日は明日の風が吹く、くよくよしたつてはじまらない。一日の苦労は一日にて足れり、だ。
- () 4. 男度胸だ、出たとこ勝負、太く短かくくらそうじやないか。
- () 5. 上を見るな下を見よ「上見ればあれほし。(欲し、星)これほし、ほしだらけ下見てくらせほしのけもなし」
- () 6. 身の程を知れ
- () 7. ものいえば唇寒し秋の風、出る杭(くい)は打たれる。能ある鷹は爪をかくすことが大切だ
- () 8. 三度たく飯さえ硬(こわ)し柔らかしさま(儘、飯)にならぬが常の世の中
- () 9. 智に働けば角が立つ。情に棹(さお)せば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくければ住みやすいところへ引越したくなる。……どこへ越しても住みにくいと悟つたとき、詩が生まれ、絵ができる
- () 10. 氏より育ち。朱に交われれば赤くなる。人は環境次第でよくもわるくもどうにでもなるものだ。
- () 11. 短気は損気というのが、気が短いやそそつかしいのは、多くのぼあい、生れつきの性分で仕方がない
- () 12. 世間は冷いもの、他人は油断のならぬもの
- () 13. 正直は最良の政策
- () 14. 狭いながらも楽しいわが家
- () 15. 青年よ大志を抱け
- () 16. ならぬ勘忍するが勘忍
- () 17. 権利を主張し、権利のためにたたかうことは、民主主義社会に生きる一人一人の人間の高い道徳的義務である。権利を正当の理由なしに放棄することは、民主主義に対する裏切りである

地方都市中間層の生活心理と意識構造 (1)

- () 18. 人もし汝の右の頬(ほほ)を打たば左をも向けよ
- () 19. 人はパンのみにて生きるものにあらず
- () 20. 花より団子
- () 21. 犬も歩けば棒にあたる。果報は寝て待て
- () 22. 楽あれば苦あり
- () 23. あとは野となれ山となれ
- () 24. 急がば廻れ
- () 25. 修身、齐家、治国、平天下(身を修むれば家とどのう、家とどのえば国治まる。国治まれば天下平らかなり。つまり、政治の根本は、個人々々が心を正しくする道徳の問題だ。)
- () 26. 権力や法律によつて行なうのは、ほんとうの政治のありかたではない。論語に「政(まつりごと)をなすには徳をもつてす。これをたとえば、北辰(北極星)その処に居り、衆星これをめぐるがごとし」といつているのはじつに至言である
- () 27. 国家というものは、人びとが各自の生活の便利のために作った道具である。お互いのためになるからこそあるので、もし不便なものとなつたり、有害なものになつたりしたら、適当に作り直すか、あるいはなくしてしまえばいい。
- () 28. 女子と小人は養いがたし(女と学問教養のない者は手に負えない)
- () 29. なにごとも優勝劣敗、よいものが残るのが自然だ
- () 30. 発明家でも、医者でも、探検家でも、政治家でも、何でもかまわぬ。ズバ抜けたのが欲しい
- () 31. 人はふだんもつともらしくていさいをつくるつているが、真の本性はけだものとあまり変らないものだ。
- () 32. ちかごろの役人や先生、あるいは親達は権威がなくて頼りない。もつと威厳のある態度で国民や子弟に対し、信服感をおこさせるようにすべきだ
- () 33. 現在の学校教育は智育偏重のきらいがある。もつと徳育や体育に力を入れるべきだ
- () 34. 人間性はいつでも変ることがないし、人間も生物として斗争本能というものをもつて生れてくるがぎり、この世に戦争や階級間の斗争は絶えることはあるまい
- () 35. 現在多くの人々、とくに都会人ほど不自然で柔弱な生活をしている。われわれはすべからく生命本然の姿に立帰つて、血がおどるような真剣な、活動的な人生を送らねばならぬ
- () 36. 一生此世に暮す間、苦き時より老ゆるまで誠にたわいもなき事なり。
世の中は市(いち)の仮屋(かりや)のひと騒ぎ
誰も残らぬ夕暮の空
- () 37. 食うてひりつるんで迷う世界虫上(かみ)天子より下(しも)庶人まで

() 38. 天は人の上に人をつくらず人の下に人を作らず

33. 次の意見のうちで、あなたはどれに最も賛成ですか。ひとつだけ選んでください
- イ. 政府の最も重要な任務は、すべての人にそれぞれ相応の、かつ安定した職業と生活水準を保障することである
 - ロ. 政府の最も重要な任務は、白力で進む人には、立身出世の機会が均等かつ十分に与えられるよう、保証してやることである
 - ハ. 政府の最も重要な任務は、国民をしてそれぞれ分に応じた社会生活を営ましめることで、そのためには、父が子に対するような権威と恩情とをもつて、国民を指導し教育しなければならない
34. 次の各文句は、それぞれ著名な学者や思想家によつて説かれた天皇観を要約したものです。あなたは、これらのうちのどれにいちばん共鳴同感されますか。いちばん共鳴するものに○をつけてください
1. 天皇は国の家長であり、全国民の父である
 2. 天皇は、たとえていうならば球の中心のごときもので、道徳共同体たる日本国家の中心人格として最も尊厳な存在である
 3. 天皇がなくては、日本の国は、オヘソのないカエルみたいに、何となくしまりがつかなくていけない
 4. 天皇は国民統合の象徴である。いうなれば、夫婦となつて一家をなすことを約した男女両性の結合の象徴たるエンゲージ・リング（婚約指輪）のようなものであるとすれば、たとえ、シンチュウに金メッキしただけの代物でも、大切に扱わねばならぬ品であることに変わりはない
 5. 天皇は支配階級が被支配階級を抑圧し、搾取するための巧妙な、したがつて彼等にとつて大切な道具であり、装置である。天皇個人は、全国民から見れば、それこそ一部「不逞の輩」によつて手段として利用されているに過ぎない気の毒な人間なのである
35. 天皇制についてあなたは、次の意見のうち、どれにいちばん賛成ですか
1. 最高、絶対の権威あるものとして、天皇をたてておくべきである
 2. 日本国の象徴として天皇をおくことには賛成である
 3. 天皇はあつてもなくてもどちらでもよい
 4. 天皇制は自然消滅するのがいちばんよい
 5. 天皇制は廃止すべきである
 6. 国民が選挙した大統領が、国を代表するような制度にしたらよい
 7. わからない
36. ストライキについて、あなたは次のどれに賛成ですか
1. 戦後の流行が知らないが、品もわるいし、勝手だし、まったくストなどやる人たちの気が知れない

地方都市中間層の生活心理と意識構造 (1)

2. ストもできない失業者や農民のことを考えたら、ストをやつて自分たちだけの言い分を通そうとするのは間違っている
 3. 政治的なストでなく、経済斗争だけならストもよいと思う
 4. 世の中にめいわくをかけないで、自分たちの関係者の間だけのことですむならストを起してさしつかえない
 5. 現在の労働条件を改善する有効な方法としてはスト以外にはないからどしどしやつたらよい
 6. ストライキは労働者が資本家や経営者に対して対等に権利を主張するために必要な手段だから、罷業権は保障されなければならない
 7. わからない
37. 共産主義について、次のどれにいちばん同感されますか
- イ. 日本に共産主義はいらぬ
 - ロ. 共産主義はなんということなしに、とにかく嫌いだ
 - ハ. 共産主義は理論や理想としてはよいことは認めるが、共産党のやりかたに厭気がさす
 - ニ. 日本の国にあてはまり、われわれのためになる共産主義、また共産党であるならよい
 - ホ. 共産主義だからといってあまりおそれず、よく理解して、よいところをとるべきだ
 - ヘ. 将来日本を共産主義国にするかどうか別として、とにかく現在の日本には共産主義も共産党も存在する必要があることを認める
 - ト. 理想の社会は共産主義社会であり、また社会は将来そうなるようになっていっているのだから、この主義を信奉して進むべきだ
 - チ. わからない
38. 産児制限について、次のどれにいちばん同感されますか
- イ. 産児制限は不自然な行為で神の意思にもとり、人間の貞操観念を破壊するものである
 - ロ. 産児制限が一般化すると、人口が減少して民族の衰亡をまねくおそれがある
 - ハ. 産児制限は、政府や知識人が奨励すべきでなく、各人の自由にまかせおおくべきだ
 - ニ. 産児制限は人口問題解決の最良の方法である
 - ホ. 産児制限は消極策で感心できない。科学技術を高め、貿易を伸ばせば人口はもつと扶養できるし、現在の国境もやがて無くなるだろう
 - ヘ. 少なく産んで、りつばに育てるのが親子双方にとつての幸福でもあり、国のためにもなるのだから、産児制限は夫婦たる者のつとめだ
 - ト. わからない

39. 次の各文について、そのとおりだと思われたら○を、もしそうでないと思われたら×をつけてください。そして×をつけたばあいは、そのわけをかんたんに書いてください

- () 民主政治の定義として、「人民のための、人民による、人民政治」というリンカーンの言葉がよく引用されるが、この三要件のなかでも、とくに「人民のための政治」という点こそ、民主政治に特有のもので、民主政治の核心をなすものといえよう。

- () 戦後の憲法および民法の改正で、いわゆる家族制度が廃止になり、子供が親を扶養する義務は、法律上はないことになった。

40. (A) あなたは学校で先生が児童生徒に体罰を加えることをどう思いますか。次の答えのうちあなたのお考えにいちばん近いもの一つだけ選んで○をつけてください。

イ. 体罰には絶対に反対する

ロ. 少々きびしい体罰を課してもよいから、しつかりした人間に育ててもらいたい

ハ. ひどくない体罰ならよい

ニ. 学校の処置にすべてまかせている

(B) あなたは、家庭で子供に体罰を課する場合、年令や性別に関しどのような考慮をはらいますか。

1. 年令について

イ. 小さいうちはよいが、大きくなつてからはよくない

ロ. 小さいうちはよくないが、大きくなつてからならよい

ハ. 年令の長幼にかかわらずよくない

ニ. 年令の長幼を問わず必要な場合もある

ホ. わからない

2. 性別について

イ. 男子には体罰を課するが、女子には用いない

ロ. 女子には用いるが、男子には用いない

ハ. 男女を問わず用いてよい

ニ. 男女を問わず用いてはいけない

ホ. わからない

3. その他の区別について

イ. 次男以下には用いるが長男には用いない

ロ. 子供の性質に応じて、用いる子供もあれば用いない子供もある